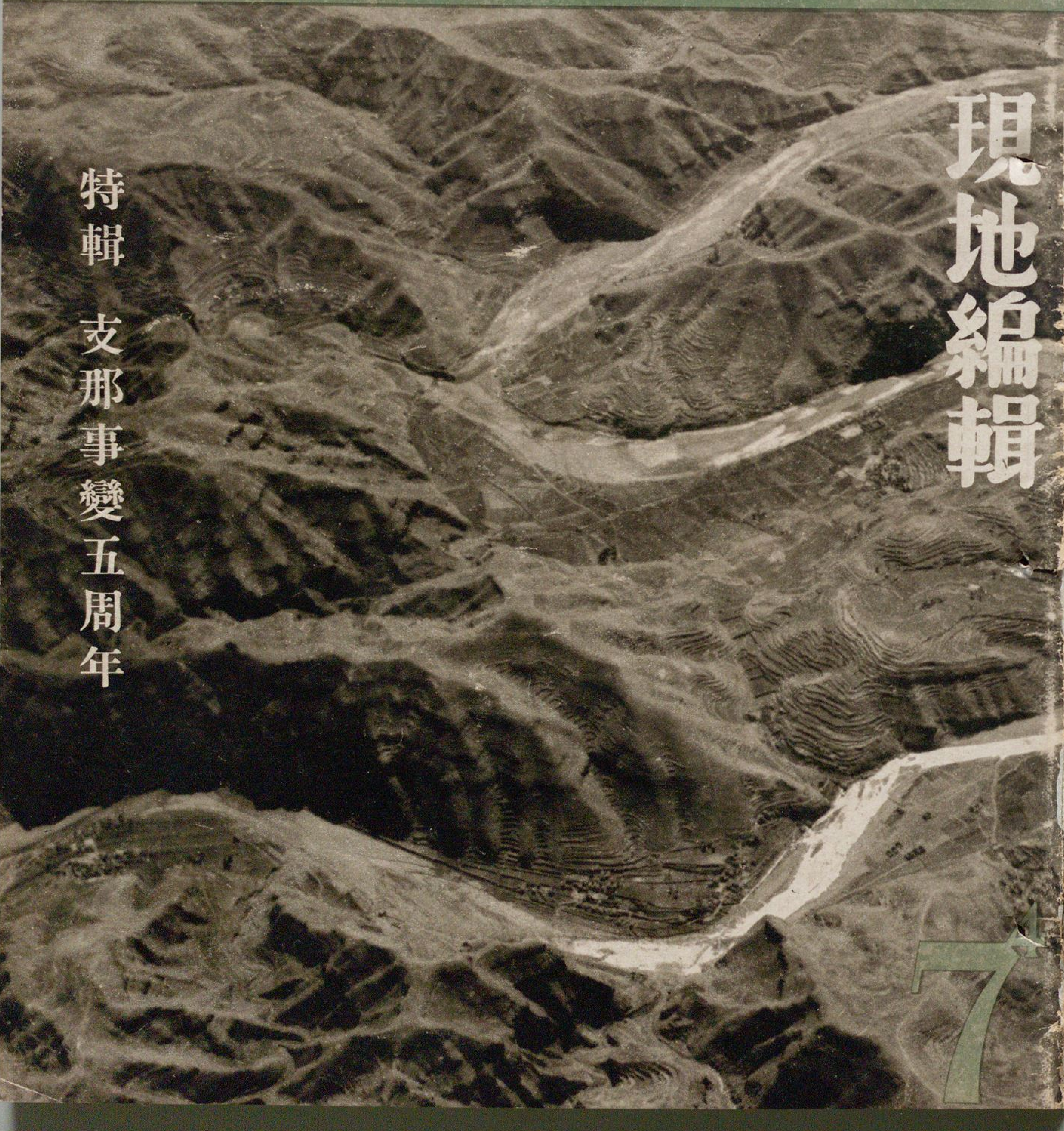
# 北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年六月十五日印刷納本
昭和十七年七月一日發行（毎月一回一日發行）第三十八號



現地編輯

特輯　支那事變五周年

7



一文字山の碑

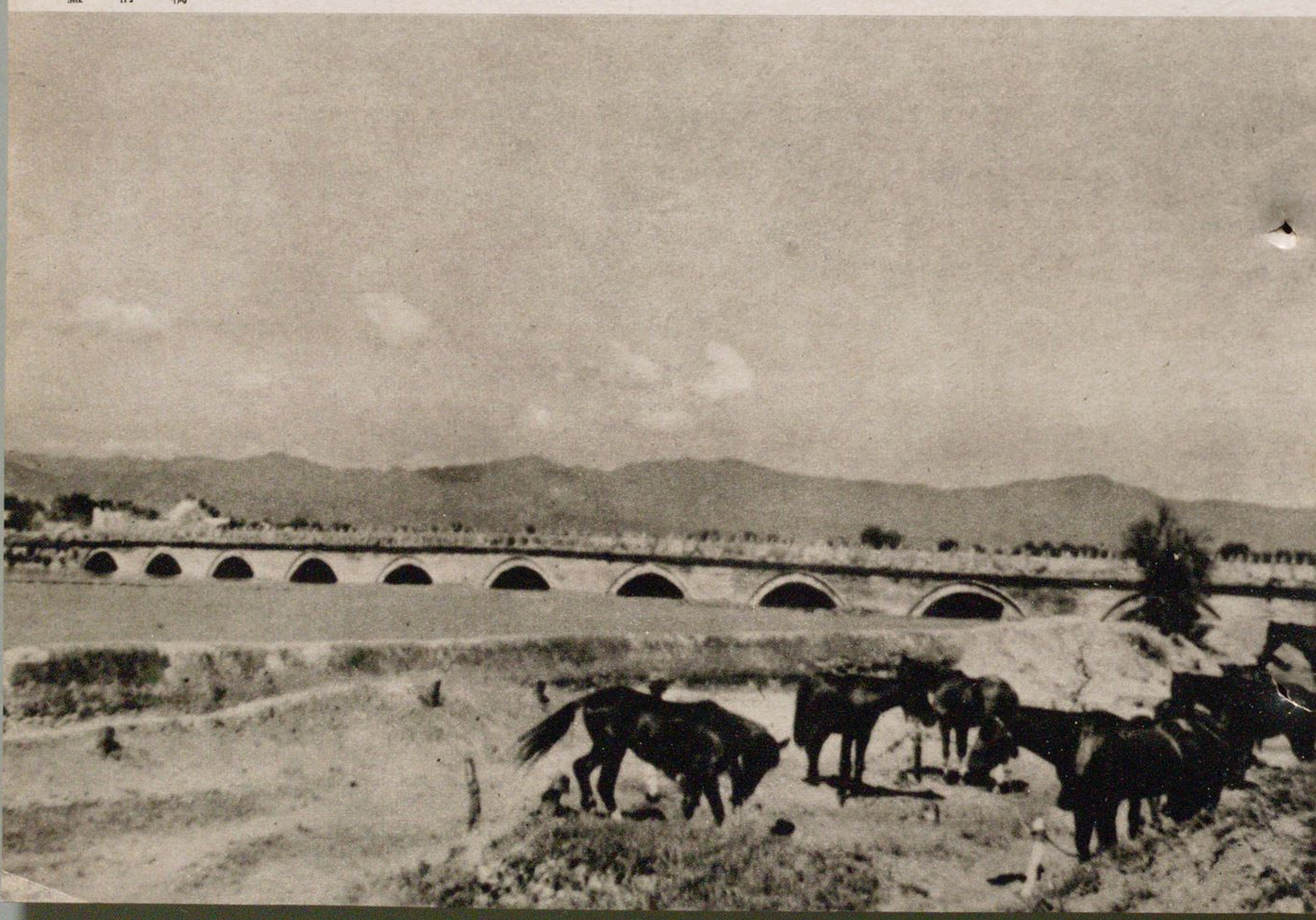
# 支那事變五周年

## 盧溝橋

國民革命軍の北伐完了後、澎湃として高まつた支那の民族主義は一應近代國家への發展の道程でもあつたが、滿洲事變を契機としてそれが日本を單一の目標とする方向に再組織されるや、ここに日支民族史上の一大痛恨事を生むに至つた。卽ち全國に亙つて失地回復、長期抵抗が叫ばれ、抗日救國運動が激烈に展開された。北支にあつては塘沽停戰協定、梅津・何應欽協定等が無視され、北支の特殊性を否定し、中央化工作に拍車をかけるなどの

擧が屢〻繰返された。かくて昭和十一年末の綏遠事件、西安事件の試煉を經て民族主義の風潮は飛躍的に昂揚し蔣介石をして對日戰準備に驅り立てた。彼が事變勃發の前年發表した鐵道建設五箇年計畫なるものは對日戰時に於ける我が沿岸封鎖に備へて、西南諸港を通じての對外交通路の確保をその第一目標としたものに外ならなかつた。このやうな日支の接觸面の尖銳化は遂に昭和十二年七月七日蘆溝橋に於ける日支軍の交戰によつて爆發點に達したのである

蘆溝橋



# 支那事變五周年

## 戰禍と水害



難行軍

民衆特に農民は事變によつて極めて多くの困難を經驗した。卽ち國民黨、共產軍の焦土戰術による諸公共機關、諸工場、建築物等の破壞、燒却又は農村における食物の强制徵發、兵士の强制募集等が行はれ、剩へ昭和十三年北支全域を襲つた旱魃と水害は北支民衆を窮乏のどん底に落し込んだ。河北省のみでも昭和十三年度、白河氾濫による被害面積は全耕地面積の一割二分强に上つた。この氾濫は浸水地域における農業生產の五割乃至八割を喪失せしめたばかりでなく、冬季作物にしても

水害





破壊された天津の市街



荒された青島の我が紡績工場

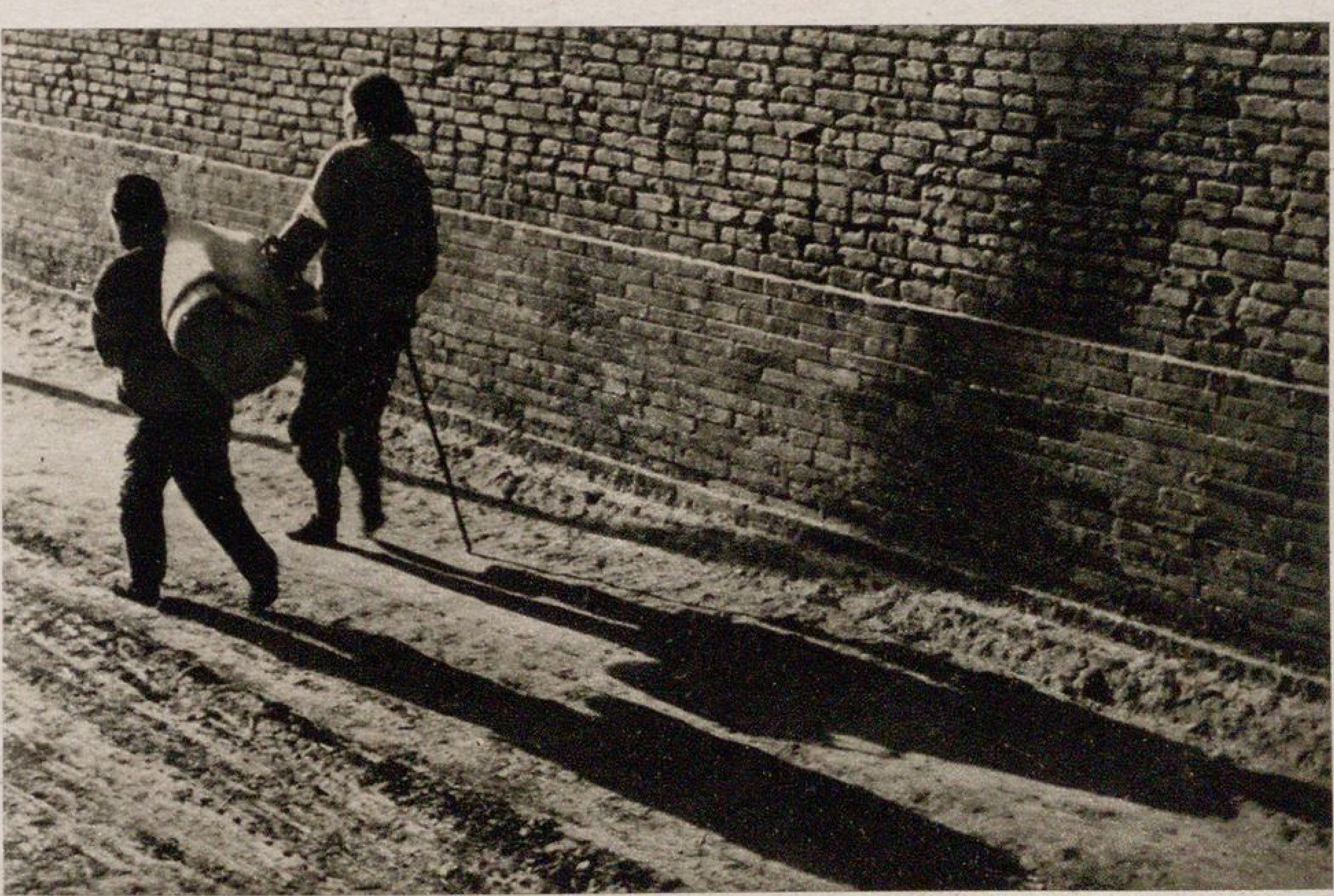
河北省農産物の大宗たる小麦の植付を不可能にし、更に冬季氷結した耕地は解氷と共に沼澤にかへつてしまふといふ状態であつた




軍宣撫班は難民に食糧を配給する

# 支那事變五周年

## 宣撫工作



夕日を浴び吾が家に歸る親子

戰禍、水害を交〻蒙つた北支農村に對して中國臨時政府はわが出先官憲の熱意ある協力を得て、種々の農村應急對策を講じた。第一は難民の直接的救濟、第二は、耕作の再開始を可能ならしめる如き諸種の援助、第三は、治水工作等であつた

難民救濟には免稅、食糧給付、施療その他が實際の手段としてとられた。これは振濟部を中心とする臨時政府の諸機關、新民會、日本宣撫班、滿鐵等の機關が擧げて動員された。事變當初においては水害等の直接的被害を受けないところでも、流通機構の破壞によつて生活物資の入手難が到る處で見られた。政府はこれらの解決策として巨額の費用を投じ、交通諸設備の復舊に努めると同時に軍特務班內に輸送委員會を組織、民間諸機關を動員して棉花、農業生產物の買付、その反對給付としての食糧配給等をなさしめたのである。中でも滿鐵の指導する鐵道愛護村の活躍には目覺しきものがあつた

宣撫班のビラ貼り



# 支那事變五周年

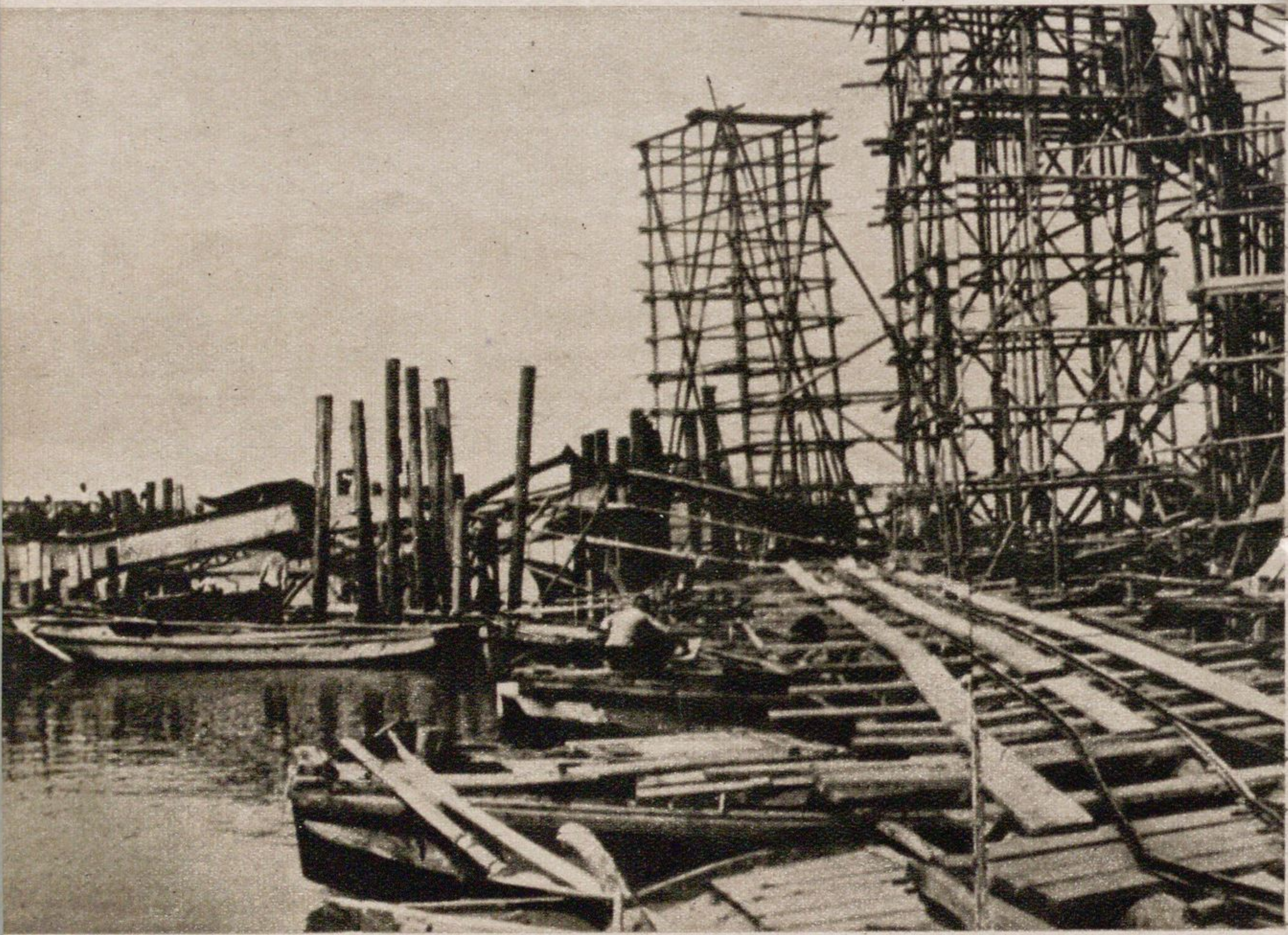
## 建設 一

日本軍占領後北支においては中華民國臨時政府、蒙疆には三自治政府並に聯合委員會が誕生し、反共、國民黨打倒、日滿支經濟ブロックの確立、それに伴ふ北支、蒙疆の資源開發等々の諸方策が行はれたが、事變當初においては何よりも先づ敵の破壞し去つた鐵道の復舊と確保とが戰鬪遂行上緊急の問題であつたしかして鐵道の復舊と確保とは事變と共に急派された滿鐵と鐵道省



従事員によつて行はれたのであるが、これはまことになみなみならぬ難事業であつた。戰禍による直接被害は實に十億圓に上り鐵道の價値は半減したといはれた。その上、北支一帶を襲つた大水害は鐵道線路に大損害を與へ全線殆んど切斷の慘狀を呈した

かやうなきびしい自然の暴威に加へて一方には執拗なる敵匪の妨害が絶えず、また物的人的資材の不足を告げるなど、二重、三重の困難な條件の下にその建設は進められたのであるが、昭和十四年三月末における鐵道の營業キロは早くも四千キロを遙かに突破するに至つたのである



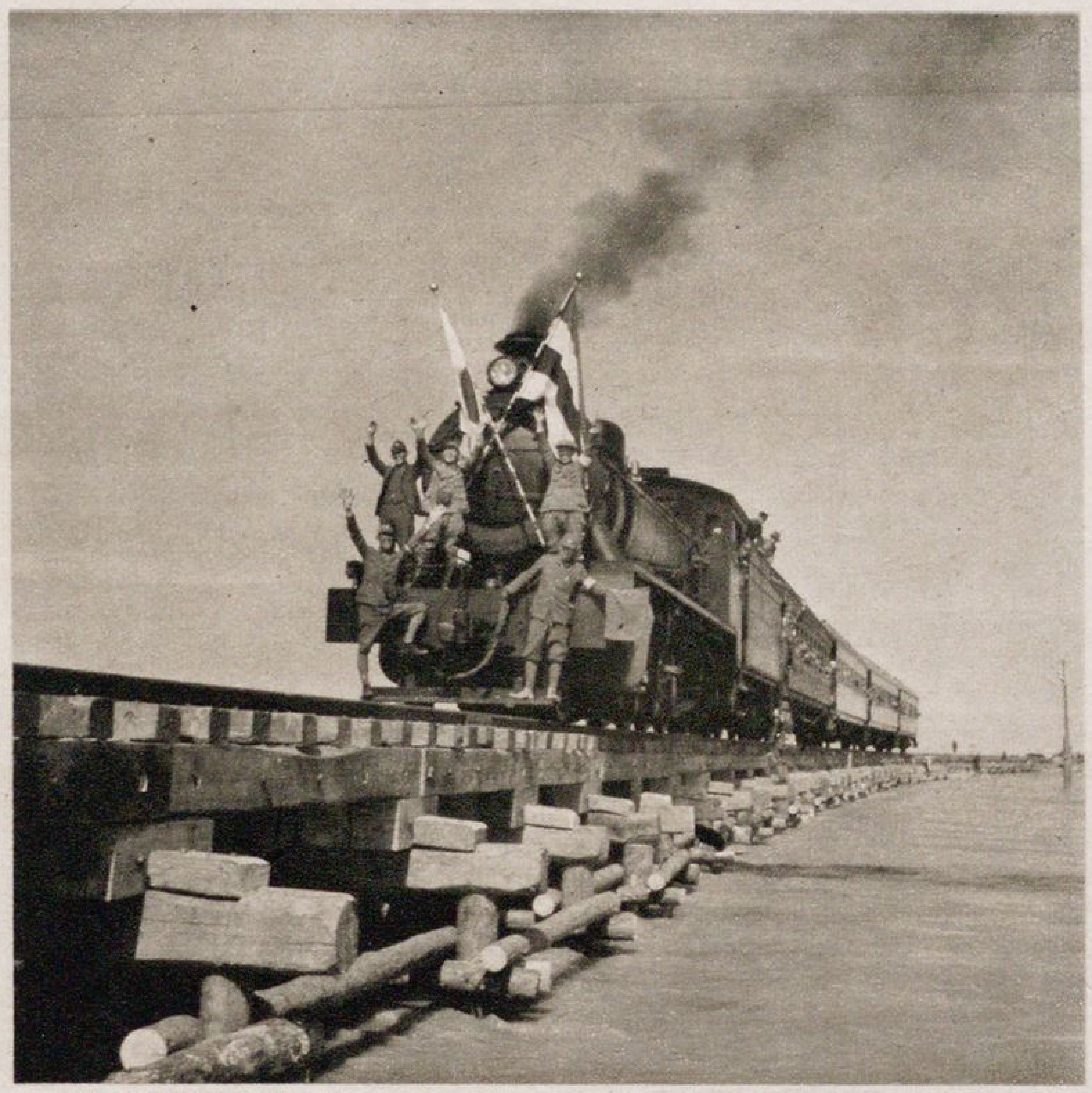
敵前架橋作業

鐵道測量班の前進

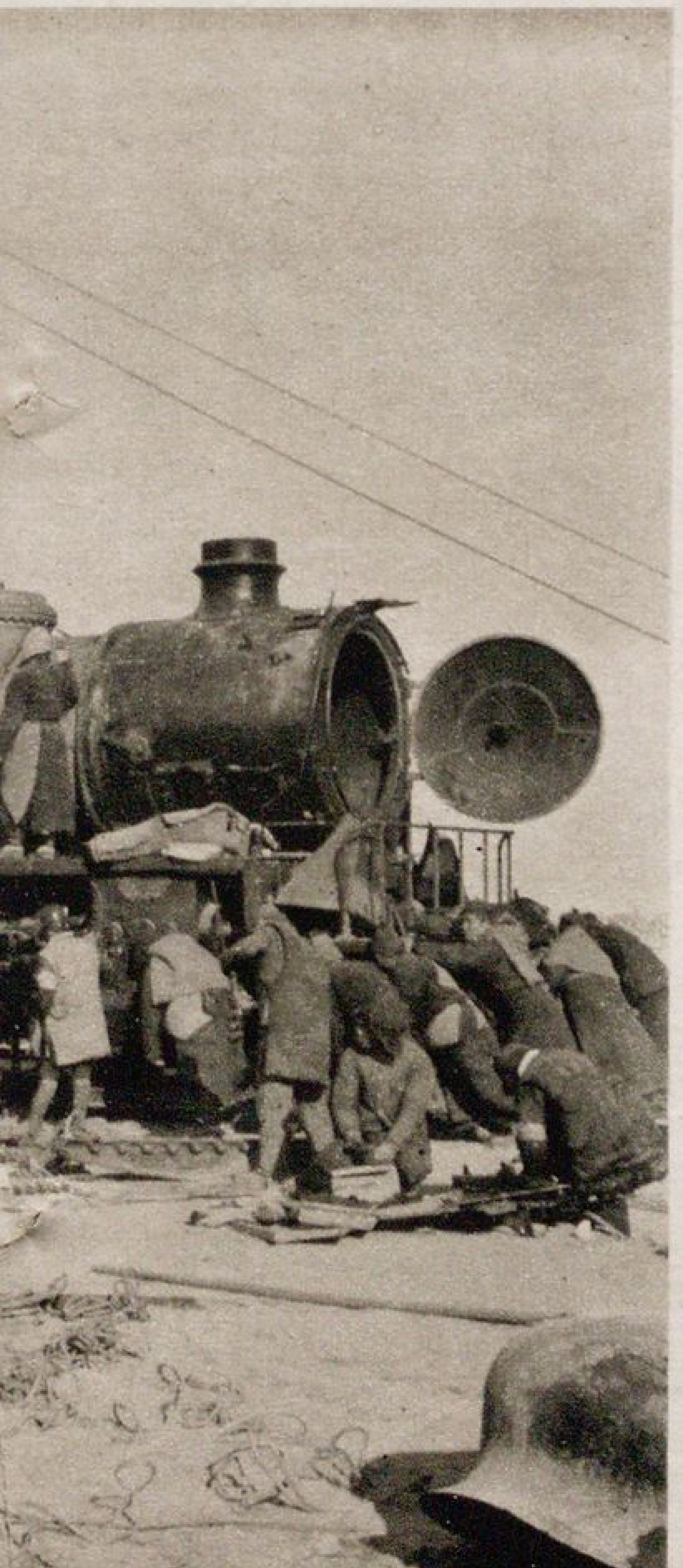
# 支那事變五周年

## 建設 二





始發列車の開通





線路の修理



改軌工事



前線に向ふ交通戰士



橋梁建設



組立作業

# 戰闘吟

渡邊庄治

われもまた華北交通の職に殪るればすなはち國のために死するなり

今まさに敵侵入しつつありと受話器に響くこゑ悲痛なり

轟然と山砲らしき音のして隣站の通話はたと杜絶えぬ

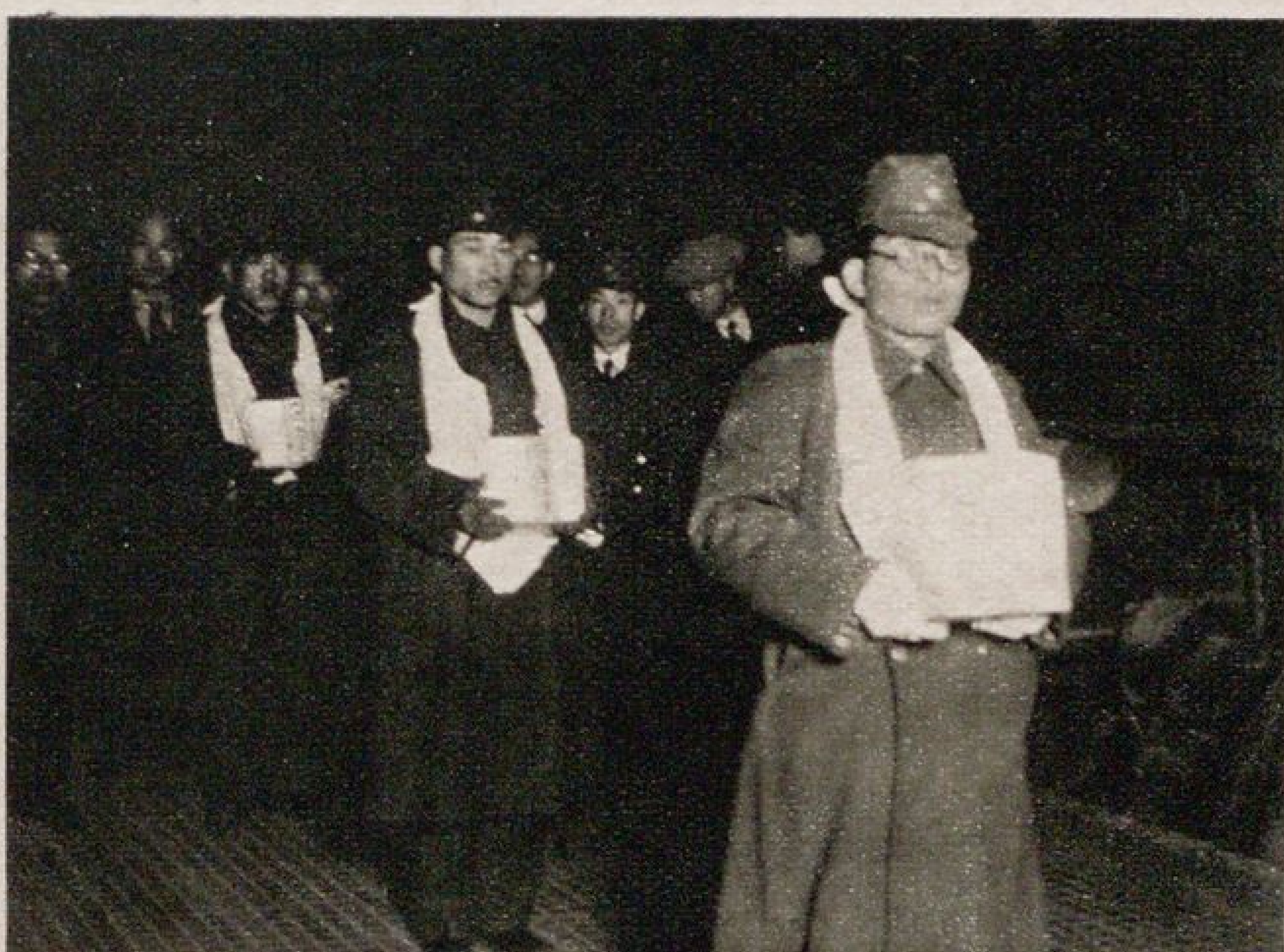
電話にて訣別の言を言ひにける聲しづかなりきやがて死にたる

ああ站舍が音すさまじく燃えてゆく眞如の闇にあかあかとして

息絶えし友の銃劍とつけかへて突撃のときをわれは待ちつつ

突つ込めばわれの左右に手榴彈を投げ撃つ敵がしかと闇に見ゆ

銃劍に觸るる卽ち突き刺してただに前進すただに前進す



戰友の遺骨歸る



驛舍炎上

# 支那事變五周年

## 交通戰士の氣魄

わが彈丸に殪れし敵は顏を上げ何か言ひつつ息絶えたるも

☆

あかつきのしらじら明けて眼に見るは鐵條網近き敵の屍

山上の壕に飯なく三日經て彈丸さへ早や今日は盡きんとす

一千の敵にかこまれし二十八人死を期してより五日こたえつ

死の前は寂に虚し二十七のわれ思ひ出すほどのことなき

歸りきて見れば何もなき荒れ跡に戰友四人は石となりて立つ

涙ただ流れてやまず人の顏みなあたたかくわれに對へり

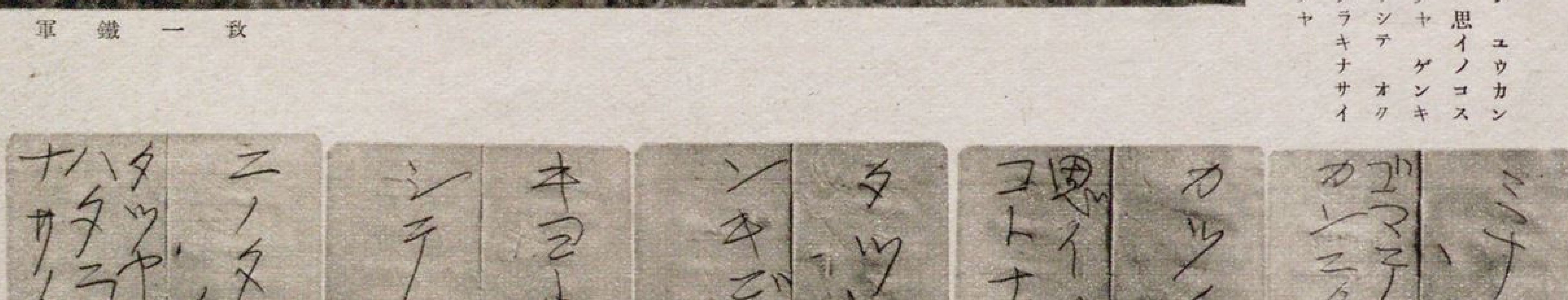
※站は驛舍のこと（筆者は華北交通社員）



軍 鐵 一 致

**遺書**

ミナサイゴマデ ユウカン
ニタタカツタ 思イノコス
コトナシ タツヤ ゲンキ
デ ベンキヨウシテ オク
ニノタメニハタラキナサイ
チヽヨリ タツヤ








華北交通三十萬社員



總裁 宇佐美寛爾

# 支那事變五周年

## 華北交通創業

華北交通マーク



昭和十四年四月十七日北京に於ける華北交通創立調印式。右側より二人目大村滿鐵總裁、王克敏氏、故大谷北支開發會社總裁、左側より二人目宇佐美華北交通總裁

昭和十四年四月十七日、華北交通株式會社創業す

善隣協和の大義宣揚・大陸交通の使命達成・滅私奉公の職責完遂・修身齊家の常道躬行――

――これは社員の實踐規範をなす社訓である

滿鐵と鐵道省とよりの派遣員に舊支那鐵道の復歸從事員を加へて一團の社員は、創業までに既に二百八十人の殉職者を捧げた

制定されたる社旗は日輪と車輪と、五族の協和と四本のレールとを現はす。大陸に進む日本の先驅である。西に向ひ、遠く西亞に進まむとするもの

交通は國運の基礎である。大いなる責務の自覺に挺身する交通戰士の建設の歩が黄土の大地に踏み出された。前途に横はるものは無數の試煉である。大東亞戰の發展とともに御民われの感激を愈〻深め、業績日に革る

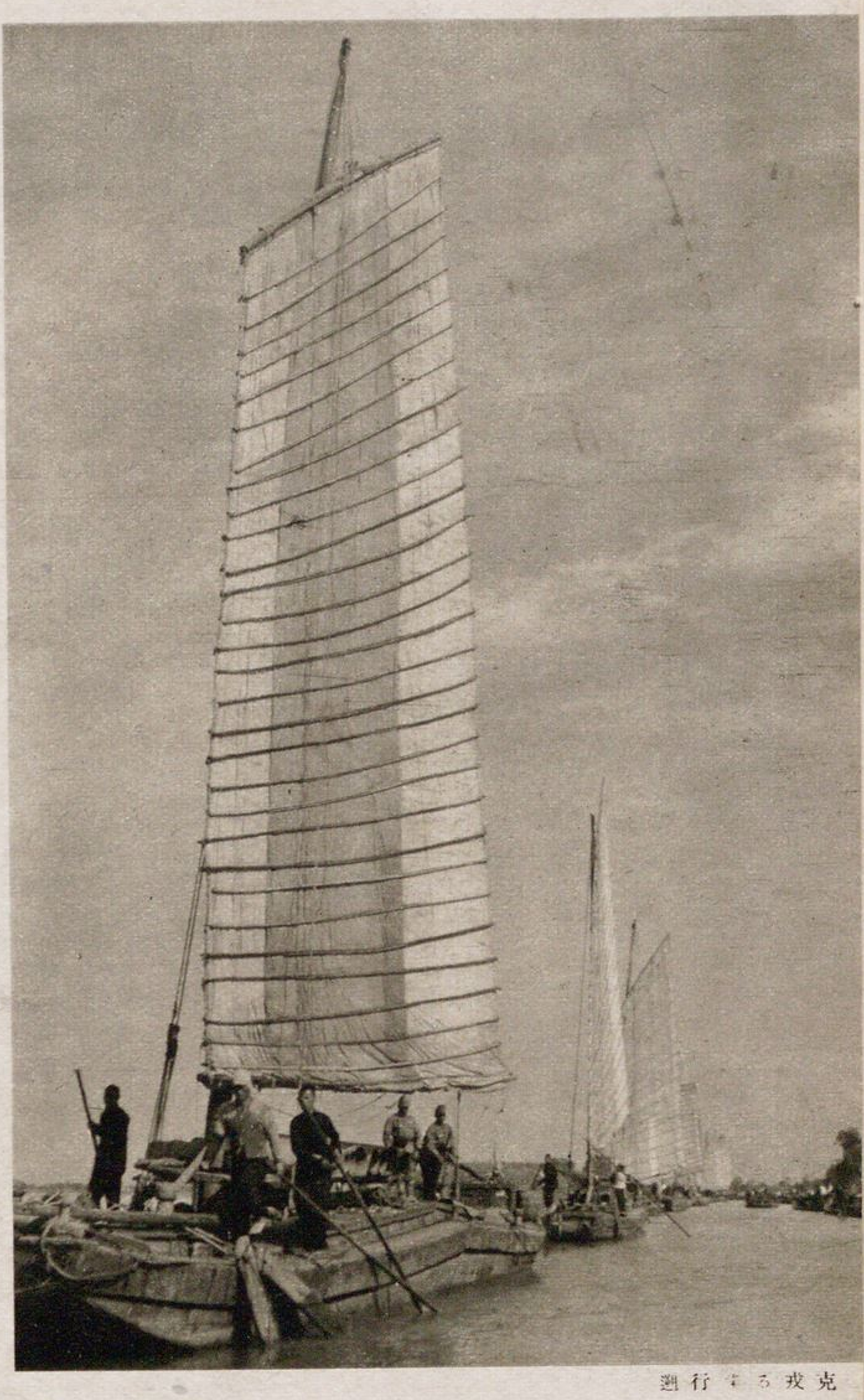
現在資本金四億圓、社員十三萬を擁する

# 躍進する水陸交通

北支の交通は戰と共に生れ、戰と共に發展する。交通は戰ひの武器である。匪區を恐れず、敵彈に愕かず、犧牲に怯まぬ交通戰士の責務の自覺が年と共に交通網を擴充、整備し產業の開發を培ひ、治安の恢復を促進してゐる

この間の努力は或は不充分な輸送力の最高能率の追求に、或は治安の不良地區の開發についての苦心である

建設の激しい努力の三箇年、鐵道の輸送量は旅客が二倍、貨物が一倍半にな



溯行する戎克





# 支那事變五周年

り、自動車の輸送量は旅客が二倍、貨物が七倍、水運のそれは旅客が二倍、貨物が十倍半になつた

建設と整備の同時的遂行が凡ゆる困難を越えて達成されつつある。鐵道は既に増積を制度化して輸送量の増大を圖り、自動車や船舶は集團運行をなすことに依つて治安の不良を克服してゐる




貨物の積込



自動車の集團運行



# 支那事變五周年

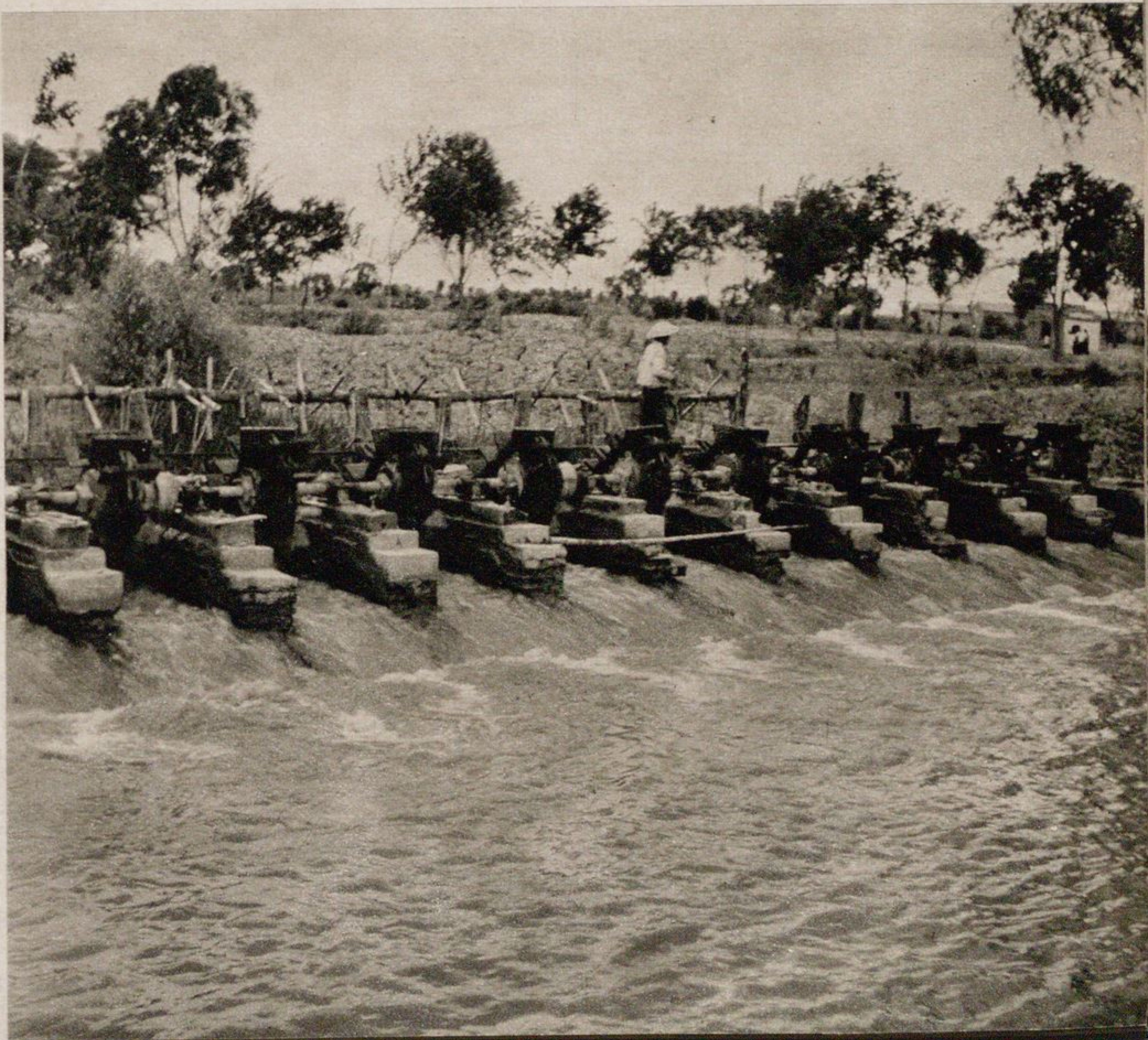
## 鐵路愛護村 一

新中國建設の基底をなすものは、農村振興の問題である
華北交通の中央鐵路農場（通州）は此の要望に應へて設立された綜合研究機關で農産、畜産、林産、農林化學、農産昆蟲の各科に分れてそれぞれ専門的研究を進めてをり、既に土地に適する數十系統の優良棉花種子を得、これを農村に配給して、北支棉花の改良を促進する等、着々と實績を上げつつある
京山線の昌黎に右農場



集團的灌漑

鐵路農場に於ける動力灌漑





北支に於ける農事科學指導の大宗—華北交通中央鐵路農場の景觀

北支に於ける米の自給な目指す水田



の分場があり、さらに鐵道沿線主要地十二箇所に愛路惠民研究所及び附設農場がある

この愛路惠民研究所は愛護村民の中から有爲な青年達を選び出し、これに農事に關する革新的な教育をさづける機關で中國農村の自力更生を念願する華北交通の意圖がよく現はれてゐる。この他、十一箇所に鐵路苗圃と、張家口に林業所があり、かくの如く、華北交通は巨額の資本を投じ、優れた技術を動員して農村の復興に盡瘁して居る。その成果はけだし期して俟つべきものがあらう

華北蒙疆に於いては、現在交通路を中心にして、敵側との間に、華華じい民衆獲得戰が展開されてゐる

華北交通會社は、同社經營による全華北の鐵道、自動車路、水運路のそれぞれ兩側十キロの帶狀地域內にある村落を悉く愛護村に指定し、いはゆる民路合作の實を上げて敵の執拗な妨害行爲に對抗する一方、此の地域をして大東亞建設の基地たらしめるべく、着々とその巨歩を進めてゐる

愛路青少年隊は、この愛護村の中核體とも云ふべきもので、血氣の青少年達によつて組織され、現に日本人警務員の指導のもとに、匪情の通報に或は線路の巡察に、その純粹の情熱を傾けて八面六臂の活躍を續けてをり、個人主義的、退嬰的な支那農村社會に革新の氣を吹き込みつつある

さらに同樣組織の愛路婦女隊があり、施療、施藥、施米等の手助けはもとより、時には進んで匪情の通報に敢然と挺身する等、目覺しい働きをつづけてゐる

これ等はいづれも新生支那の輝しい象徵として、各方面の注目を浴びてゐる



愛路婦女隊の警備訓練

# 支那事變五周年

## 鐵路愛護村 二

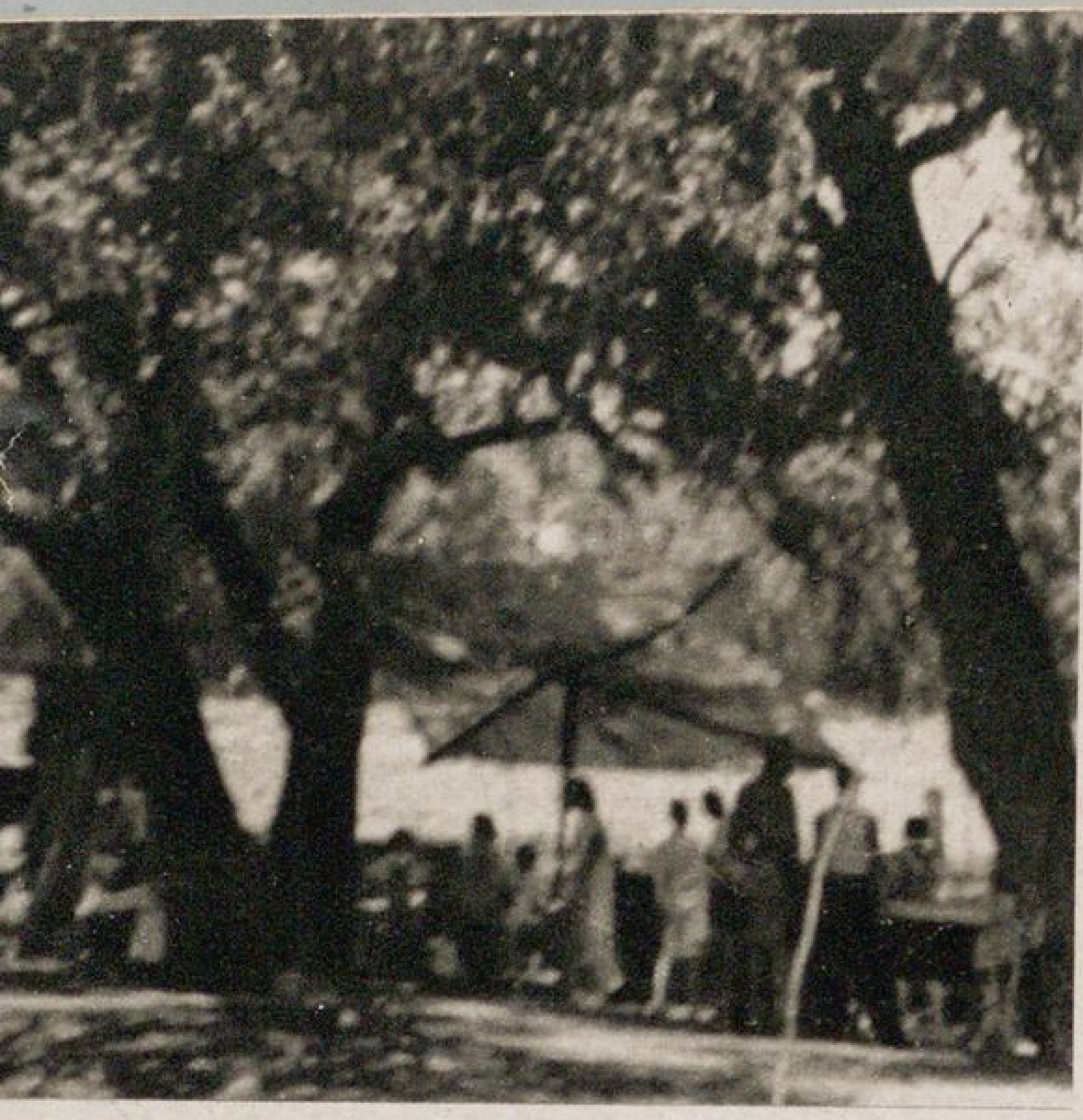


愛路少年隊



愛路少年隊の鐵路警備

# 什刹海



萬壽山昆明湖の清い流れが北城松林閘から城内に入り、積水潭となり、さうして什刹海となる

この一帶は元時代には海子ともよばれ水深も相當あつたらしく、帆檣林立の盛況を呈した記錄もある

什刹海の名は湖岸に名刹十箇を存したのに因るとも謂はれてをり、此等の古刹は其の後殆んど廢滅した樣である。その中の高廟は西曆一八六〇年の英佛聯合軍侵入當時、英人パークス等の一行が監禁せられた所として歐米人の間に知られてゐる。また後海の北岸には醇親王府があつて、今の滿洲國皇帝は實に此處で御降誕あらせられたのであつたが、その對岸に近い季廣橋の西北方には慶親王府の花園もあつた

什刹海はまた蓮の名所である。夏季都人の行樂場と化するのは實にこの沿岸であり、特に北海北門外の邊から響閘を經て會賢堂の前に至る柳の堤の雜沓は驚くばかりである

曹雪芹の筆になる「紅樓夢」の大觀園は會賢堂の近くにあつたと謂はれる柳のこかげに楚々たる小姐が逍遙し、古風な石橋を配して蓮が水に映つてゐる。曹雪芹ならずとも小說の材料になりさうだし、畫としては其のまますべてがモデルになり得るところである

夏になると澤山の茶社、遊戲場が林立するが、何れも端午に開いて立秋に閉ぢるを例とする



茶館



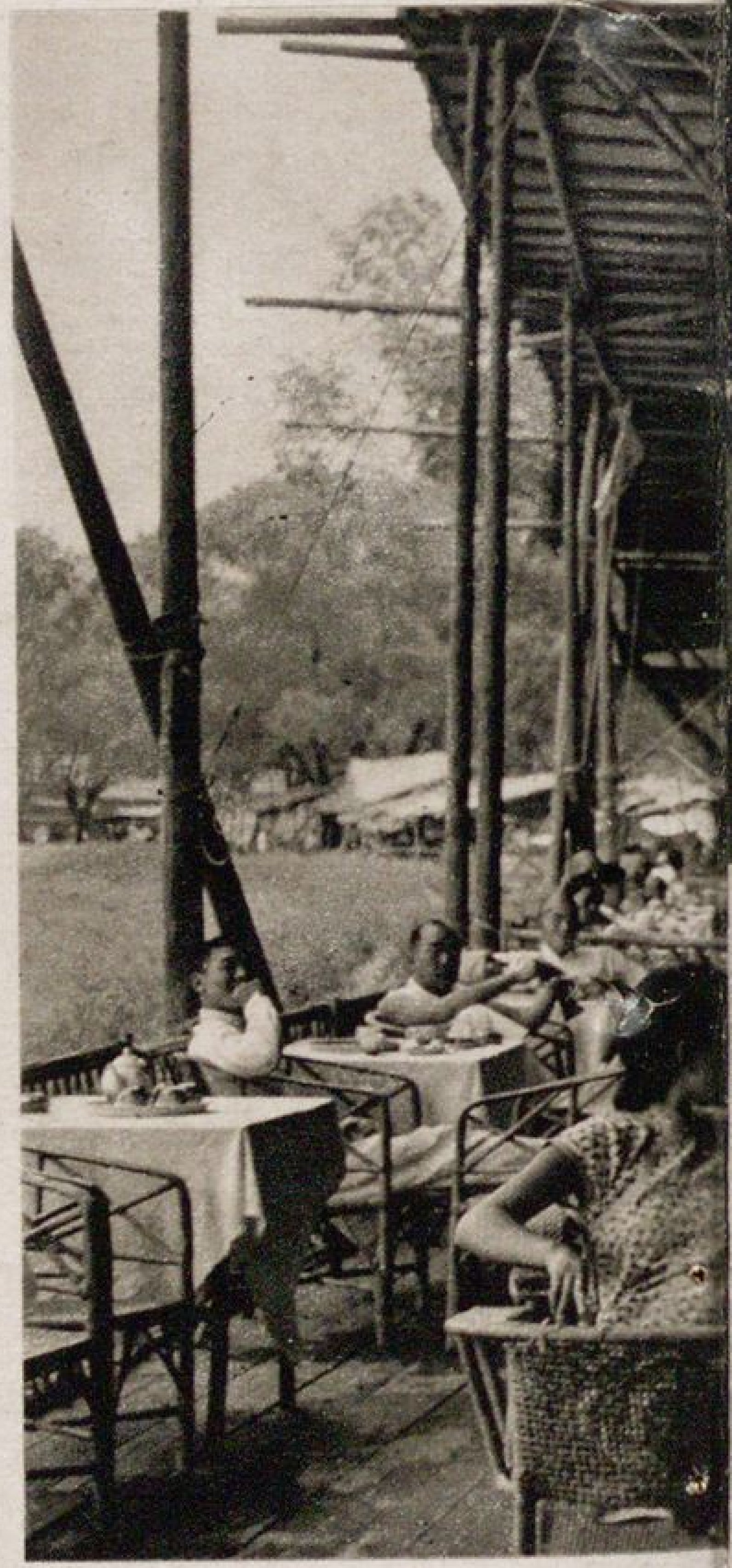
蓮



八寶蓮子粥



堤の柳





蓮の實の下を

# 小孩子(こども)とたべもの



赤大根をたべる



水をのむ



おいしい晝食



坊やと切糕





團扇賣り

龜の子と蠅たたき賣り



# 夏のものうり

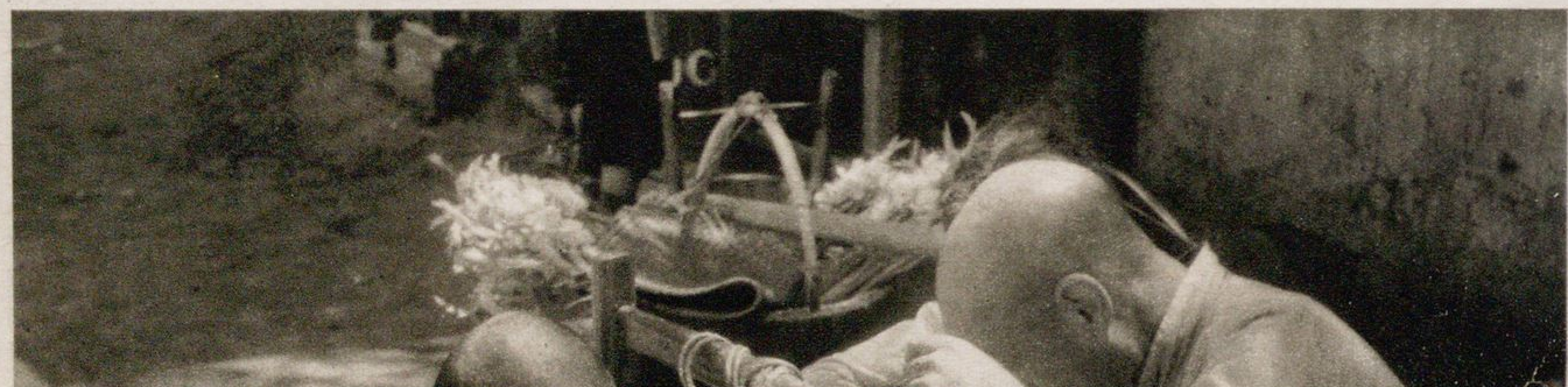
葦簾初めて捲く人を困しむる天
燕語呢喃　午眠を起す
説くを休めよ　先生生計の拙なるを
新荷葉葉　已に錢をなす（愚山）

そんなに恬然とは行かぬでせうが、その日暮しの貧之にも徹した暢氣さがあるのです。これでよく商賣になるものかなと思ふほど、愛嬌じみたアンチヤンもをります。但し田舎のをぢさんが農閑期を利用して小遣かせぎに出て來るのは季節の匂も濃やかにうれしい點景です



扇子賣り

まくは賣り



# 王府井

北京で最も近代的な街はどこであらうか。古いゆかりのこの灰色の都に、誰もが決つたやうに考へるのは王府井大街である。故に王府井は北京の流行をつくる。百貨店、帽子屋、靴屋、洋服屋、寫眞館、時計店、化粧品店、理髪館、レストランなど近代生活に必要なものがここには揃つてゐる。最近には日本の松坂屋、鐘紡サービスステーションも進出して、東亞共榮圏の一つの役割を果してゐる。王府井は昔から較べると少くとも表面上は變貌しつつあり、新しい店も澤山出來てゐる。けれども、どうしたものか街を歩いても、何となく昔からの變らない王府井のやうな氣がしてくるのである。近代性のなかにも傳統の深い影が漂つて中國の封建性をそつと感覺させる。その名も清朝の豫王府（親王）の井戸のあつた處と云ふので王府井と名づけられたと言ふ。時は七月、槐の並木が鋪道の上におほひかぶさつて、美しい北京娘が歩いてゆく。日本人たちのせかせかした足どりと中國人の緩慢な脚並が亂れた速度でここを往來する。而しこの亂れた足なみもやがては揃ふ日があるかも知れぬ。さうすると王府井のあのなつかしい昔の匂ひは果していつ迄も變らずにゐるであらうか



日覆ひ



北京の街路樹は防蟲のためすべて白く塗られてゐる



槐樹に覆はれた王府井大街

田舍の龍王廟（雨の神様を祠るところ）



# 救雨
（あまごひ）



雷鳴を司る神

稲妻の神



農民にとつて雨期の一雨は血の一滴に價する。雨期に旱天が續けば、苗は枯れ、土はひび割れ、果ては恐ろしい飢餓がひかへてゐる。幾千町歩見渡す限りの畑が沙漠となつて農民は塗炭の苦しみを受ける

燒石に水、役に立たぬと知つては居ても、枯れがれの井戸からくみ上げた水を桶で運んでは畑に撒く。血のにじむ努力が續けられるが結局は……。雨期の旱天は全く悲慘である

ひでり續きの時、降雨を祈つて龍王廟で雨乞が行はれる夜陰に乘じて他所の龍王廟から龍王を盜み出し三體なり五體なりの龍王を集め頭に柳の葉をかむり喇叭、馬號を鳴らし、笙、笛子、箏を吹きその音天にもとどけと三日間雨を乞ふ。知事も村長も、女も子供も地に伏して雨を降らせ給へと祈りに祈る。この樂器が皆吹奏樂器であるのも面白い。降雨がなければ更に三日。降れば御禮として廟前で芝居を行ふ。降らなければ祭主は刀をとつて龍王を威嚇する。にもかかはらず降雨がなければ、天國に雨がなく、又龍王の能力がないものとして、龍王は打ち捨てられる

農業國ならどの國でもある雨乞ひ。無智な農民の行事と土俗的にしか取扱はれない。然し、雨を乞ふ農民は、懸命である



雨乞行列

雨　乞



# 棉花の栽培


陸地棉（米棉）の花

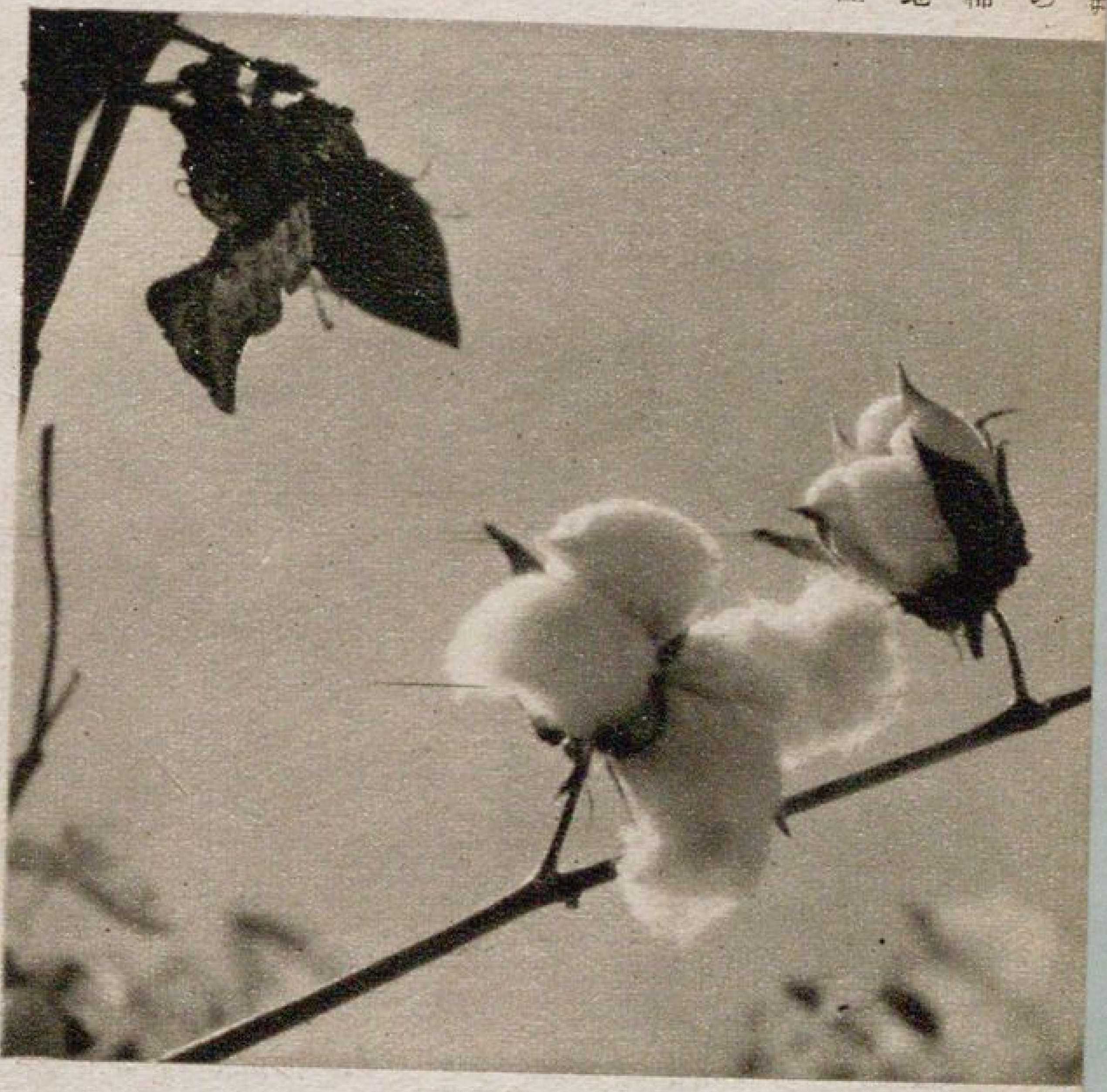
北支は大東亞共榮圈中最適の棉花生産地であつて、現在既に年々數億萬斤の生産を見つゝあるのであるが、共榮圈內の需要を充すには遙に遠く、大東亞戰爭の進展に伴ひ之が增産の要請は焦眉の急務として愈〻高められるに至つた。從つて現在北支は內地以上に食糧增産の必要に迫られてゐるにも拘はらず日華軍官民は一體となつて食糧增産の必至情勢から來る棉作地擴張の困難性を突破すべく諸般の施策を講じ立體的增産即ち單位面積當收量增加に依る飛躍的增産を目指して邁進しつゝある

今日北支に生産せられてゐる棉花は支那棉と陸地棉の二種がある。支那棉は所謂亞細亞棉の一種で、印度がその原産地であり支那本土に輸入栽培せられたのは漢若しくは宋の時代と云はれてゐるが、北支で栽培され始めたのは明代以降で、その栽培が洽く普及したのは淸朝の康熙、乾隆帝等の植棉奬勵後である。陸地棉は米國に最も多く生産せられる關係上一般には米棉と云はれてゐるが、北支に於ける米棉は淸朝の光緒末期に米國より輸入試作せられたのが始めであり、その栽培が農民に普及したのは前歐洲大戰以降で、北支に於ける紡績工業の發達に伴ひ漸次支那棉の領域を侵蝕し、今日に於ては最早米棉の生産が支那棉より遙に多い。此の支那棉と米棉作の消長はその纖維の特質と栽培收支に基くもので、支那棉は蒲團綿、中入綿としては最適品であるが、纖維が短く且つ粗剛なため紡績原料棉としては米棉に及ばない。これは近代紡績工業の發達に伴ふ米棉需要の增大と農民が米棉作に慣れ栽培が上手になつてその採算が有利になつた爲である


陸地棉の

北支の棉花は概ね四月下旬より五月上旬に播付けられ、次いで間引、除草、鋤地、摘心等の手入れが行はれるが、灌漑設備のある所では十日か十五日隔位に灌水が繰返される

播付けられた棉は間もなく發芽し、農民の手に育まれてぐんぐん生長し、六月上旬に至れば蕾をつけ始め、七月上中旬に至れば開花を見る。棉の花は同じ錦葵科の植物たる芙蓉や葵に似てゐるが米棉の花は大形白色、支那棉の花は小形の黃色のものが多い。開花結實した蒴は始めは極めて小さいが、日々肥大して二十日もすれば米棉は胡桃核大、支那棉は拇指頭大となるがそれ以降は殆ど肥大しない。米棉の蒴は開花後概ね六十日、支那棉の蒴は四十五日前後で開絮する


陸地棉の蒴の開

北支の棉は八月末乃至九月始めから開絮し始めるので、之が收穫は概ね九月上旬より開始せられるが、爾後一週間乃至十日隔位に霜が降り棉が枯死する迄繼續される。北支棉の收穫高は繰棉機で種子を除いた繰綿で一段歩當平均米棉五、六十斤、支那棉四、五十斤前後が普通である



防蟲劑の撒布



支那種蕎棉の收穫、米棉は上向に開絮し、支那棉は下向に開絮す


無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！
―北京・北海公園―


新生國策イリヂュウム
白金ペン付
書きよく
體裁優美
構造堅牢
クラウン万年筆
流線型
―津浦線・濁流濱―
大阪・東京・小倉 株式會社 澤井商店

# 大東亞戰下の北支・蒙疆の交通

宇佐美寛爾

去る四月十七日、華北交通株式會社總裁宇佐美寛爾氏は同社創立三周年記念日に當り、東京中央放送局から日本全國及びマニラ、昭南島に及ぶ海外放送を行つた。この講演は、大東亞戰下に於ける北支・蒙疆の交通に就て特にその建設途上の全貌を窺ふにたる好個の資料である。敢てここに再錄する次第である。（編輯部）

護國の英靈と、忠誠勇武なる皇軍將兵各位に對し、北支の一隅より、心からなる感謝を捧げますると共に、御稜威のもと、國威全世界に洽く、國民總力による亞細亞再建の大理想が、日に月に顯現せられつつある事實に對しまして、無上の光榮と、歡喜・感激を覺えるのであります。

顧みまするに、八紘一宇の大業は、肇國以來二千六百年、古今を貫く皇國日本の大使命でありまして、支那事變は素より、滿洲事變、日露戰爭、日淸戰爭、日韓合併、三韓征伐と、歴史を遡りますれば、悉くが、いづれも大東亞戰爭の必然につながるのでありまして、海外、大陸に在る者、ひとしほの感懐があるのであります。

＊

由來、道はローマに通ずと申し、道長安に通ずと稱し、東西古今、大いなる歴史は交通に發し、大いなる文化は交通に據つて興るのであります。

『交通なくして建業なし』といふ鐵則は、既に通念となつてゐるのでありますが、特に近代の交通、就中、未開發の地區に於ては、交通そのものが直に、國土・國防の骨格であり、政治・經濟・文化の動脈であります。

従つて、主要なる交通の主權を掌握致しますことは、直ちに一國の消長をさへ意味しまするが故に、かのベルリン・ビザンチン・バクダツドを結ぶ鐵道の敷設、所謂ドイツの三B政策が、ロシアとイギリスとに對する直接の脅威となり、これが第一次歐洲大戰の一因をもなしたのであります。

＊

日本に就て見まするに、海外の大陸として、最初に經營致しましたる滿洲におきましては、日露戰爭直後、國家の代行機關として滿鐵會社を創設し、これに附屬地行政をも委ねまして、後藤新平伯を初代總裁とし、一般經濟は素より、敎育・衞生・土木等、一切の運營に當らしめたところ、廣漠荒涼た

## 內容

第四卷・七月號

る原野は、隆々として生成發展、拮据二十數年の後に至りましては、滿洲事變を契機とする滿洲國の建國を見、爾來、今日の隆盛に及んだのであります。

*

支那事變勃發と同時に、日本は第二の大陸經營を、北支・蒙疆の地に課せられたのでありまするが、その經綸もまた、交通に始まつたのであります。

昭和十二年七月、蘆溝橋畔に銃聲轟きまするや、皇軍の要請に應へて、交通機關は、間髮を容れず起ち上り、滿洲から滿鐵社員が、日本から鐵道省員が、直ちに馳せ參じまして、硝煙渦巻く北支・蒙疆全域に散開致したのであります。

敵の寸斷致しましたる路線、破壞されましたる橋梁は、斯くして直ちに復舊され、兵團と軍需との輸送に當つては、全員、不眠不休の努力を致したのであります。全く彈丸雨飛の中でありますので、今日迄に、既に、八百數十名の交通從事員が、軍服を身につけざる戰士として、大陸の土にその鮮血をそそぎ、建業の尊き礎石となつたのであります。

*

昭和十四年四月、日・華合辦で以て華北交通株式會社が創立されたのでありまするが、皇國の深きおもんばかりによりまして、この國策會社は、特に中國法人と成し、創立以來茲に三年、本日は偶ゝその三周年の日に當るのであります。

この機會に、些か回顧を試みまするに、現在運營六千粁の鐵道は、創業當時に比して一千粁を延長し、特に、時局下、戰時産業の動力資源たる石炭の輸送に關しましては、極力、その增强に努めました結果、よく日・滿・中支の要請に應ずるを得ますると同時に、作戰機動上の必要、或は資源開發上の要求に基づく新らしい鐵道の建設は、既に一千粁になんなんとして居るのであります。

元來、イギリスは支那に對する搾取政策の中心を南に置きましたる關係上、京漢鐵道と云ひ、津浦鐵道と云ひ、鐵道は專ら北より南へと延ばされまして北方の物資は長い距離を南方へ運び去られて居つたのでありまするが、京漢線上の石門と津浦線上の德縣とを結びまして、中原を東西に貫いて走る百八十粁の新線を建設致しましたることに依つて、靑島は寶庫山西の吞吐港となつたのであります。

このことは、北支乃至支那大陸の交通政策、延いて經濟政策の根本的轉換であり、歴史的是正とも申すべき事實であります。

尙、舊來の支那鐵道は、列國の利權として、支那侵略の手段でありますると同時に、軍閥政權が、その私腹を肥やすための民生搾取の脈管でもあつたのでありますが、斯かる不明朗なる性格は、日章旗が山海關を越えて進められ、日本の鐵道人によつて鐵道が指導運營せらるるに及び、一瞬にして拂拭されまして、如實に皇國の襟度と道義と、從つて國威とを示しつつありますことは、洵に欣快とするところであります。

鐵道と共に一貫的に綜合經營を致して居ります自動車は、創業當時の三倍に達する一萬五千粁の路線を運行し、また、內河水運路線は四千粁へと進展致したのでありまして、地方經濟の振興・文化の促進に少なからず寄與するところあつたと信ずるのであります。

*

亞細亞再建の中樞が、日本を中心として、滿洲・支那に在ることは、今更申す迄もなく、所謂「北守南進」の基地として、且つ亞細亞共榮圈の一環としての北支・蒙疆の重要性は、二千億トンに近い石炭を大宗とする資源の點からも、また自ら肯けるのでありますが、その北支・蒙疆の現狀に鑑みまする時、建業の根幹でありまするところの交通の任務は、直ちに以て皇道宣布の基地たるべき任務に通ずることを痛感致しまして、發奮興起、ひとしほ使命の大なるを思ふのであります。

抑ゝ、皇國現下の大業は、とりも直さず全亞細亞に、否、全世界に向つての皇道宣布に他ならぬのであります。

皇道の宣布は、客觀情勢に對應して種々の實踐となつて現はるるのでありますが、北支・蒙疆におきまする當面の問題は先づ治安の强化であります。

皇軍將兵各位の不斷の努力によりまして、治安は著しく好くなりつつありますが、共產八路系の蠢動は、猶、やまぬのであります。

蔣介石は『日本が北支・蒙疆で確保したのは、點と線だけである』と申したのであります。點とは都會、線とは鐵道を意味すること御承知の通りでありますが、氣の毒にも、彼は「點と線とは面の單位である」といふ原則と、「點と線とから面が構成される」といふ事實とを忘れてゐるのであります。

正に、點と線とに胚胎致したる皇道精神は、今や加速度的に面の方面に宣布され、治安の强化も此處に發しつつあるのであります。

＊

華北交通におきましては、管下の鐵道・自動車・水運各路線の沿道、左右各〻十粁の地帶內に在る中國農村を、軍・官・民協力のもとに、隣組式に編成致しまして、これを愛路村と呼んで居るのであります。この組織は、滿鐵が滿洲國有鐵道の經營を委託されまして、不肖私が其の運營の任に就くに當りまして創案致しましたる鐵道愛護村の形式を、そのまま採つて北支に移したのでありまして、北支に結成されて居りまする愛路村は、その數八千、住民三千萬人に及ぶのであります。

即ち約一億の總人口の內、その約三分の一が此の圈內に在り、而して華北交通は、此の圈內の中心を走つて居ります鐵道・自動車・船舶の運營者として、これ等民衆に廣く且つ直接に接觸致します關係上、この愛路地區住民を對象として、皇道宣布を致しますには、最も適格を具へて居ると確信致しますと共に、治安の現狀におきましては、これ等民衆を指導し、彼等をして喜んで交通防衛の楯たらしむるを要しますので、各種の愛路工作に、懸命の努力を致しつつある次第であります。

直接の治安强化に資する警備、保安はもとより、共產對策としての思想工作、それに產業助成を兼ねまして、中國農村青年の錬成道場たる愛路惠民研究所を各地に設けまして、農村の科學的管理の指導を行ひまする一方、中國青少年を動員致しまして、愛路青少年隊を結成し、愛路婦女隊を編成し、或は訓練に、或は授產に、一路、向上の途を開いてゐるのであります。

また、民生利福の增進には、施療・施藥・物資の廉價配分等、あらゆる方法と力とを凝集致しまして、交通戰士は挺身、沿線の大衆に呼び掛け、彼等をして、各〻その所を得せしむべく努力しつつあるのでありますが、一方愛路村民は、また克く之に應へて交通戰士に協力し、路線の守護に任じて建業の人柱となりましたる者、已に一千名の多きに達するのでありまして、玆にも眞の日・華協力、民路合作の實を見ますことは、聖業完遂の上よりして限り無き喜びであります。

我々はまた社業の一端として、中國子弟の初等教育機關としての扶輪學校其他の教育機關をも全地域に設立し、數萬の中國子女に對しまして、社員が直接、指導して居るのでありますが、その童心に、深く、日本への信賴と、敬愛の念が扶植されつつありますが故に、この子女達の明日には、大いなる期待が掛けられるのであります。

＊

私は、華北交通の社訓の劈頭におきまして「善隣協和の大義を宣揚すべし」と、明確に指示致して居るのでありますが、北支・蒙疆に於ける交通網は、皇道光被の基地であり、十二萬社員、就中、三萬五千の日本人社員は、皇道宣布の使徒であるといふ自覺と信念とに燃えて、ひたむきに不惜身命、同僚八百の屍を乘り踰えまして、一途に大陸建業の礎石となる決意を固め、以て皇軍の治安工作に協力致して居りますが故に、『治安の克復、亦、期して待つべきものあり……』と、母國並に海外の同胞各位に御報告申し上げ得ることを、光榮と存ずる次第であります。

＊

滿洲の經營を第一、第二の經營を華北と見まするならば、日本は、今や第三の海外經營途上に在り、南方の再建しきりに興りつつありますることは、誠に御同慶に堪へぬところでありますが、日・滿と共に亞細亞共榮圈の中核たる北支・蒙疆の地に對しましても、交通の事に關しましては勿論、あらゆる點におきまして、此の際一層の御支援、御鞭撻賜らんことを、偏にお願ひ申し上ぐる次第であります。

事變回顧

# 天津東站死闘記

秋元正美

## 三十分の出發命令

『助役さん驛長さんから電話です』十八時二十五分の貨物列車を發車さして夕飯の辨當を開きかけてゐたところへ驛長から電話が掛つてきた。今頃なんだらうと思つて、受話器を耳にした。

遂に來たのである。待望の北支派遣―蘆溝橋において日支兩軍が衝突してから三日間、滿を持して心ひそかに待つてゐた北支派遣命令が遂に來たのである。驛長の落ついたなかにも張切つた聲が鼓膜を通り越して一足飛びに神經へピンピンと響く。

『出發は急ぐ、今日の三四列車だ。身廻品だけ持つて、とにかく身體だけ運んでくれ。奉天發車は夜半二十四時頃とのことだ。遲れないやうに賴む！』

全身の皮膚がピリピリツと緊張した三四列車の開原發は十九時一分だ。時計を見れば十八時三十分、出發まで後わづか三十分しかない。

『よしツ！　行くぞツ！』と強く自分自身に言ひ聞かせると同時に、直ぐ勤務の交替手配をした。

『オイ、〇〇君、徹夜明けの佐々木助役を呼び出してくれ。僕は今から北支へ行く、發車まで三十分しかない。賴むよ』

どうして社宅まで走つて歸つたか判らなかつた。併し家に着くまでは走りながら大體の考へが纏つてゐた。

身重の妻は早目に入院して子供を生むこと……トランクにシャツと沓下と洗面道具とクレオソートを入れること……ボーナスの殘りがあるから半分だけ持つて行くこと……。內地の親には出張した旨、妻から知らすこと等々。必要の最少限度を處置して、トランク一つ持つて家を飛び出した。時計を見たら後十二分しかない。妻は只オロオロして初產のことを云つたやうだつた

『腹が痛くなつたら向ひの主任さんの奧さんに相談しろ。そして早目に入院しろ。給料は全部使つてよろしい、なんでも驛長さんと主任さんの奧さんに相談しろ。詳しいことは出張先から手紙で知らせる。おや行つて來るぞ！　身體を大事にしろ、早目に入院するんだぞ！』

これだけ言ふのが精々だつた。全く忙しい、こんな忙しい出張が世界中の何處にあるだらうか…而も行先は戰地である。家から驛まで洋車で五、六分かかつた。それでも驛に着いたら發車までまだ五分あつた。

勤務中、命令を受けてから、發車まで僅か三十分の餘裕よりなかつたが、開原驛からの第一回北支派遣員谷助役と私と驛員三名、計五名は一人の遲刻者もなく、驛長以下駈けつけた同僚に見送られて勇躍出發したのである。行先は單に北支とのみ聞かされて……。

## 派遣地決定

翌朝、山海關に到着した。此處には既に奉鐵人事科、輸送課の面々が我々の到着を待ち受けてゐた。輸送計畫、人事劃當等に徹宵奮闘してゐたと見えて脂汗で皆の顏が光つてゐた。表面に出ない計畫者の眼に見えない苦勞である。派遣員の勤務地を讀み上げる〇〇氏のネクタイの結び目が宙に浮いてゐた。私は奉天の淸水君と共に郞坊驛に派遣と決つた。山海關を午後出發、天津に到着したのは夜の十時頃だつた。

天津から先の驛には、軍隊も駐屯してゐない、派遣員は全部滿鐵天津事務所の社員倶樂部に宿泊し、命令を待つべしとのことで一同佛租界にある社員倶樂部に行つた。そして天津東站勤務十三名は、その夜から驛にて勤務すべしとのことで、旅裝も解かず直ちに驛に引返し、徹夜勤務に服し、天津以遠行きの者十數名は待機することとなつ

た。ところが翌朝徹夜した者が歸つて來て『とても十人や二十人でやれるものぢやない、これでは三日も勤務したら全部倒れてしまふぞ！』との報告だ。無理もないことである。北寧從事員がゐるとはいへ、大天津驛の軍事輸送作業をわづか十二三名でやることは如何に選り抜きの者が揃つても到底不可能に近いことで、加へて北支の七月中旬の暑さである。恐らく派遣員にとつては生れて初めての炎熱體驗であらう。誇張ぢやなくて、本當に二三日したら倒れるに違ひないのだ。

　これがため――待機組は全部天津東站にて勤務すべし、天津以遠の人員配屬は別途考慮す――との命令が出て、黄村、郎坊、楊村、豐臺に派遣指定された者は天津東站と總站にて全部勤務することになつたのである。全部といつても二十五六名に過ぎない。併し初代小林驛長以下助役六名、驛員約二十名は一致團結、烈々たる氣魄に燃え、傳統の滿鐵魂を發揮して、前途全く豫想を許さざる混沌輸送との戰ひを開始したのである。

## 襲擊四時間前

「支那軍約二千名、トラック五十臺を以て天津東站及び總站を襲擊すべく行進中なり」との情報が、七月二十八日二十二時頃、○○司令部に到達した。當時我々派遣員は○○司令部と同室で勤務してゐたので情報は直ぐ傳達された。○○司令部河合部隊長は次々に命令を下した。

「貨車は出來るだけ構內の本屋近くに纒めよ」「國防婦人會その他婦女子は速刻租界に引上げよ」「北寧從事員の動靜に注意せよ」「步哨線は○○、○○であるから、步哨線外に出て作業する場合は兵の護衞を求めよ」「列車の取扱は特に愼重にし、輸送班、隣接驛との連絡を充分に保持せよ」等々。

　事變發生後、毎晩徹夜で活躍してゐた國防婦人會の人々は、皆租界へ歸つて行つた。我々は、次々に到着する軍用列車の取扱をなす傍ら、細長い構內の諸所に停留してある軍貨積貨車の構內集結を開始した。列車取扱は坂口助役、構內作業は小藤助役、構內計畫は及ばずながら筆者が擔當した。

　手足となつて働く者は、いづれも滿鐵選り抜きの猛者二十名である。

　連絡線の貨車引上げから歸つた連中が、やや上氣しながら――、

『闇くて服裝は判らないが、支那人があつちにもこつちにも、この眞夜中の線路の附近をうようよしてゐましたよ！』

『直ぐ其處の橋の下にもたくさんゐたよ！』

　こんな話をしてゐる時、三時過ぎに到着する豫定の軍用第○○○○列車が到着した。一時四十分の到着である。通信隊やら憲兵隊の兵隊さんが三十名ほどで他は全部糧秣積である。機關車を入庫させに行つた操車方の○○君が歸つて來て若干昂奮して、

『信號所の下まで行きましたが、變な奴等がうろうろしてゐて、どうも變です。警備兵を二三名お願ひします』

といふ。

『すぐそこの信號所から先へ行けないなんて變だね。二百米もないぢやないか、しかし若しものことがあつてはいけないから、守備隊にお願ひしよう』

　私は○○君と共に中ホームにある守備隊の本部へ行つた。隊長は、小隊の大部分を引卒して機關區の構內警備に行つて留守で數名の兵隊さんしか殘つてゐなかつた。それでも事情を話して兵隊さん二人に御苦勞を願つて○○君と共に機關車入庫の警備に行つて貰つた。守備隊から驛本屋へ歸るべく跨線橋に登つて深夜の驛構內を見渡した。

　驛前の線路は全部滿線で、一番線では輜重隊が一箇列車全部のトラックをもう殆んど卸下完了しかかつてゐる。

　今到着したばかりの四番線の列車は二三十名の兵隊さんが下車して軍裝をあらためてゐる。先刻連絡線からの停留車引揚げを完了した入換機關車は東洋線一番線の入口で休んでゐる。機關士や機關方は作業の機關車の手當をしてゐることだらう。

　夜が明けたら先づ一番線の空車で一箇列車組成して滿洲へ返還しよう。次に二番線と三番線の盈車はまた連絡線に押し込まう。さうすると線路が三本空くから晝までの到着列車には支障ないだらう。その中には四番線、五番線の荷卸も濟むだらうし、明日の輸送はまあなんとかなるだらう――などと考へながら事務室に歸つてきた。

## 敵　襲

　事務室に歸つて椅子に腰を掛けた瞬間である――。

　パン、パン、パンツ！

　直ぐ近くにただならぬ銃聲だ！　この銃聲！　嗚呼これが天津襲擊事變の火ぶたとなつたのだ。鐵道屋は何かあ

るとすぐ時計を見る。銃聲を聞いて無意識に時計を見た。

時、正に二時五分！

昭和十二年七月二十九日午前二時五分！　これぞ天津事變勃發の時刻である。

銃聲がしたのと殆んど同時、河合部隊長はホームに飛び出した。老齢に近いが流石は帝國軍人、鍛へに鍛へられた聲を張り上げて、嚴然と號令を掛けた。

『敵襲！　敵襲である。兵は夫々任務に付け！　軍人以外の者は司令部に引き揚げッ！　指揮は河合部隊長が執るッ！』

筆者は呆然とした。頭腦の働きが停止したといふか、思考力も神經もエヤーポケットに入つてしまつたやうに、一瞬呆然としてしまつた。精々五六秒の間だつたらうが、實感では五六分も呆然としてゐたやうな氣がする。併し次の瞬間には夢からさめたやうになすべきことに移つてゐた。

『輸送班、第一宿舍、第二宿舍に電話を掛けてくれ！』

と云つた時は、既に、坂口助役が電話に嚙み付いてゐた。續いて――

『皆外に出てはいけないぞ、勝手な行動をとらないやう、この部屋から出ないやうにしてくれ』

と、皆に注意した。

○○司令部である我々驛員の事務室に居留民團の人々、天津商業の生徒その他の人々が集つて來て、部屋は一杯になつた。銃聲は愈々間近に激しくなつてきた。然し幸ひに前の線路の貨車が遮つてくれるため部屋には彈丸は入つて來ないが部屋の外、屋根、貨車などに實彈の當る音が激しい銃聲の中にも盛んに聞える。

輸送班と第一宿舍には電話が通じた第二宿舍（旭街にある）に辛じて通じたと思つたらプスリと切れてしまつて後はいくらベルを鳴らしても全然應答がない。○○少尉が軍司令部に第二回目の連絡を盛んにしてゐる――。

『東站には○○名の歩兵と××名の兵しかをりません。敵は約○○名の見込であります。至急應援隊を賴みます』

『……』

『はッ、さうですか、一箇中隊應援出動ですか……』

ここまで話した時、司令部の電話も同じやうに切れてしまつた。電話で生きてゐるのは驛の直ぐ前にある輸送班と驛間の直通電話だけで、これは最後まで生き通した。彼等の銃聲は愈々激烈となつてきた。迫擊砲、機關銃、小銃、拳銃の音が何十發、何百發、何千發と入り亂れて一時に炸裂してゐる。東站を圍んで五十米の間隔を置き正に彈丸の吹雪である。重機と輕機は横なぐりの雨と霰だ。小銃は間斷なくまた時には不規則な合間をおいて豪雨のやうに鳴り響いてゐる。味方のうつ拳銃の音は玩具に等しく、時々哀れに情なく聞える。東站に正に嵐の坩堝と化したのである。

## あかりを消す

『アッ！　部隊長殿、電燈がついたままです！』

と、誰かが氣付いて叫んだ。

『さうだ、敵から丸見えだ。誰か消してくれ。驛全部を消してくれ』

事務室の電燈が消えただけで外は全部そのまま明るく點いてゐる。氣がつかないうちは何ともなかつたが、こちらが明るくて敵は暗い。こちらは丸見えだと判つた今では、意志のない無表情な電燈が無慈悲に明るく見える。事務室だけ消えても廣い東站の電燈は煌々と點いてゐるのだ。

『消して呉れ！』との部隊長の命令だ。

驛の設備を取扱ふのは驛員の任務である。躊躇すべき場合ではない。然し電燈の大元のスヰッチが何處にあるのか殘念ながら我々は知らなかつた。隣室にゐる北寧從事員に聞かなければ判らない。

『中熊さん、支那人にスヰッチのある場所を聞いて消してくれませんか、賴みます！』

中熊さんは通譯だ。この昂奮してゐる時、支那人にこちらの意思を通じさせ得るのは通譯以外にはないのであるこの危險な嵐の中へ何處へあるか判らないスヰッチを探しに行くことは、賴む者も賴まれる者も、考へる餘裕のない昂奮の絕頂にあればこそ出來たのである。中熊通譯は敢然として事務室から出て行つた。

（巧くやつてくれ、無事にやつてくれ、一刻も早く……）と、念ずるのみだつた。

それから何分經つてからだらうか、時計を見るのを失念したためよく判らなかつたが、約二十分ほど經つてからだつた、東站の電燈はパッと一齊に消えた。中熊さんは遂にやり遂げたのである。眞暗闇となると敵の攻擊目標が

困難となり、明るい時より味方は有利になつたのである、にも拘らず、闇は人の心を頼りなく淋しいものにする、暗くなると同時に急に戰鬪が激しくなりそして襲擊されてゐるといふ實感が眞劍に味はされてきた。

通譯が戰況を見ようとしたのか、または何か用事があつたのか、ホームに出ようとして入口に立つたと同時である。迫擊砲彈が物凄い閃光と共に入口の眞上で炸裂した。我々は一瞬目がくらんでしまつた。あツといふ間もなく通譯は兩眼をやられてしまつた。負傷する者がボツボツ出てきた。司令部には既に三人の兵隊さんが横になつてゐる。看護兵がゐないので司令部の兵隊さんと看護兵上りの派遣員〇〇君が介抱してゐる。ホームで指揮していられた輜重隊の輸送指揮官〇〇部隊長も戰死されたとのこと、激戰中友軍に死傷者の出ることほど悲しく情ないことはない。死傷者の出る毎にそれだけ友軍の戰鬪力が減つて行くのである。そして恐ろしい結果が近付くのである。

### 彈丸缺乏

早く夜が明けてくれ、夜が明けたら敵は退却するだらうと、我々は夜が一刻も早く明けることを願つた。が、北支の七月といふのに夜の明けることのなんとおそいことか……この頃になり漸くわが軍は彈藥缺乏し始めた。

『もう彈丸が十發もありません！』

『もうあと五發しかありません。補給を願ひます！』

と盛んに彈丸の缺乏を告げ、補給を要求してきた。然し司令部は直接の戰鬪部隊でないため彈丸の準備はないのである。

『司令部には彈丸は無い。彈丸はあまり射つな。三發になつたら、射擊を止めて敵の突擊に備へろ！』

『軍司令部から應援隊が一箇中隊來るから、それまで射擊を少くして敵の突擊に備へておけ！』

彈丸の要求に對する部隊長の答はいつもこれであつた。二時間も前に租界を出發した筈の救援隊は未だ到着しない。彈丸の不足勝な我軍の射擊は段々力が無くなつてきた。反對に敵の攻擊は益々盛んになつて來たのである。

救援隊は未だ來ない。電話は不通となつてゐる。唯一の連絡方法は、驛と輸送班間の直通電話により輸送班を中繼して輸送班の無電をもつて軍司令部と連絡する方法である。つひにこの方法で連絡を執つた。しかし軍司令部からの回答は眞に悲壯なものだつた。

『フランスが萬國橋を引き揚げたため、佛租界よりの通行は不能なり。租界も目下有力なる敵と交戰中にして、東站應援は不能なり。彈丸は東站停留車中より捜査せよ。東站は飽くまでその場において死守せよ！』

嗚呼、遂に東站は全く孤立無援となつたのである。

### 曉の偵察機

何時間經つたらうか。待ちに待つた夜明けが漸くやつてきた。が、實に意外である。敵は退却しないのだ。滿洲事變の時は、夜が明けると敵は大抵退却したものである。然るに、北支の敵は夜が明けても退却しないのである。退却しないどころか却て益々猛烈に攻擊してきたのである。

窓から覗くと、驛前の建物の二階の窓といふ窓から敵の銃口が見える。友軍は彈丸が無いので射擊こそ止めてゐるが、銃劍をガツチリと敵に向けて、驛舍の壁、柱等を利用して色々な姿勢で僅か五十米程の間隔をおいて敵と對峙してゐる。

なんのために我々は夜明けを待つたのだらうか？

『オイ、飛行機ぢやないか』――誰かが叫んだ。

『なに！　飛行機？』

我々はぢツと耳をすました。確かに聞える。敵が射つ激しい彈丸の音の合間合間に、あの勇ましい爆音が確かに聞えてきた。我々は頭から日本の飛行機と思ひ込んでしまつた。まだ我々は敵の飛行機を見たことがなかつたので飛行機といふと、なんの疑ひもなく日本軍のもの、救援に來てくれたものと思つてしまつたのである。

助かると思つた時ほど人間が強くなることはないだらう。助かると思づた瞬間、我々は元氣百倍した――。

『おい、飛行機に連絡しろ。敵の位置を知らせろ！』――が、飛行機との連絡はどうしてとるのか？

『車票を並べて矢印を造つたらどうだらう？』

『風で飛んでしまふだらう！』

『水をつけてやれば大丈夫だ！』

『それよりもシヤツを振つて味方の所在を知らせた方が早いぞ！』

こんな問答をしてゐる間に飛行機は東站の眞上に來てしまつた。たつた一機ではあるが、翼の日の丸がはつきり見える。

飛行機は旋回し始めた。連絡するのは今だ、早くなんとかしろ、と焦るだけで、我々は策を知らない。氣の早い者はホームに飛び出して無茶苦茶にシヤツを振つてゐる。

『誰か手を貸して下さい、飛行機と連絡をとりますから……』

今まで氣が付かなかつたが、見ると飛行隊の下士官が一人立つてゐた。いつの間にか長い棒を二本と綱を準備してゐたのである。

『どうするのですか？』

『この綱に通信文を括りつけて、跨線橋の上にこの棒を渡すのです。低空飛行で取り上げて貰ふのです！』

やつと判つた。よし、やらう、と派遣員が五六名飛び出した。跨線橋は二箇所あるが山海關寄りの方に結び付けることにした。

飛行機は、地上からの連絡を待つかのごとく何回も旋回を續けてゐる。早く連絡しなければ飛行機は歸つてしまふかもしれない。彈丸は飛んでくるが危いなぞと考へてゐる暇はない。猿か栗鼠のごとく素早く跨線橋に駈け登つた。何秒かかつたか何分かかつたか知らないが、こんな敏捷な作業は未だ嘗つて見たことはない。筆者はいつの間にか彈丸の來ることも忘れて、ホームに出て皆を激勵してゐたのである。

作業は神技にも等しい速さで終了した。幸ひに一人の怪我人もなかつた。

「我々の意思が通じたのか、飛行機は低下し始めた。一度大きく廻つて山海關の方から眞正面に跨線橋目掛けて引返して來た。

おお！　見よ！

飛行機から重りを付けた綱が吊下げられてゐるではないか！　我々の意思が完全に通じたのだ。ぐんぐん近付いてくる。物凄い低空飛行だ。我々の目は、全神經は、張り渡した綱と、綱に括りつけた通信文に集中した。この通信文こそ東站の死活を決するのだ。

無事に渡つてくれと神を念ずるより外はない。飛行機はぐつと廻つて來た綱も重りもはつきり見える。運命の通信文は、一本の綱に結ばれてぢツと空に浮いてゐる。愈々來た、映畫のスリルそのままだ。（頼む！）と念じたが駄目だつた。

萬事休す！

飛行機から下げた綱と重りは良かつたが、我々の張つた方の綱は飛行機からの重りが引掛かると同時に切れてしまつたのである。これこそ本當に頼みの綱が切れてしまつたのだ。二度と繰返しが出來ることぢやない。

今の飛行機の行動を見た敵には、我我の連絡策戰が判つてしまつただらう二度と繰返したら敵は全銃口を擧げて我々を狙撃してくるに違ひない。到底千に一つも成功は覺束ないのである。

飛行機は、またも旋回し始めたが、たつた一回旋回したきりで、ぐんぐん歸り始めた。今の今迄氣が付かなかつたが爆撃機ではなかつたのだ。一發の爆彈も落さず、我々の決死の通信文も受け取らずに何處へ行くのか歸るのか、ぐんぐん速度を增して遂に我々の視界から見えなくなつてしまつた。

我々は、飛行機にも見捨てられてしまつたのだらうか。夜が明けたら退却するだらうと、期待したことも、飛行機が來たので助かると昻奮したことも、すべてが無駄になつたのだ。

飛行機が去つた後の淋しさは何ものにも例へやうがなかつた。敵は愈々調子に乘つてきた。今や我々は底知れない「死」の現實に再び直面することになつたのである。

## 遺　書

彈丸は缺乏し、補給の道はない。敵は激しく身邊に攻擊して來た。將に突擊の氣配が靈感に響く。

司令官は司令部にゐる一同に言ひ渡

した。

『みんな覺悟してくれ。愈〻敵の突擊だ。敵が突擊して來たら、なんでも好いから武器にして勇ましく戰つて死んでくれ！』

『重要書類は燒却の準備しろ！』

眞に痛恨の極みである。愈〻最後が近付いたのだ。我々は書類を全部机の上に積み重ねた。そしてローソクと燐寸を準備して燒却責任者を定めた。

『敵が來たら點火しろ、燐寸を五六本一緒につけるんだ！』

司令官以下將校は拔刀した。今まで入口に立つてゐた步哨は伏せの姿勢になつた。が我々には武器がない。簿記棒、算盤、ペンチ、腰掛けなど手當り次第に握り締めた。筆者は日頃持參の海軍ナイフをじつかり握り締めた。敵がホームに飛び上つて突擊して來たら、これで一人でもよいからやつつけてやらうといふのである。

然し仲々敵は飛び込んで來ない。勝算が全然なく、唯々捨身となつて張りつめてゐるのは堪へられない焦躁である。

若い派遣員の顏を見て筆者は底知れない同情と憐愍を覺えた。

『皆しつかりしてくれ、一緒に死なう。一人でも生きようと思ふと淋しくなる。我々は滿鐵社員の名を汚してはいけない。滿洲事變の際、我々の先輩は皆雄々しく戰つて死んだのだ。我々は滿鐵の名と先輩の名を汚してはいけないのだ。皆一緒に死なう。一緒に死ぬと思ふと淋しくはない。敵がホームに上つて來たら、皆一緒にホームに飛び出さう。そして滅茶苦茶に鬪つて死なう！』

『判りました！　皆一緒にやります』

『よし、皆一緒に死んでくれ！』

一同、今や死を超越した境地に到達したのである。死を決すると、まづ肉親のことが頭に浮ぶものである。妻のこと、子供のこと、親のこと等が次々に浮ぶ。若い者は或は愛人のこと、許婚者のこと等が浮んだかも知れない。筆者は急に子供に何か云ひ遺したくなつた。滿洲事變の際は、派遣前必ず遺書を机の引出しに入れて行つたのだが今度はその餘裕がなかつた。今、死を眼の前にして何か言ひ遺したくなつたのは筆者のみではないやうである。

あちらでもこちらでも手帳を出して盛んに何か書き始めた。こんなものを書いても敵に蹂躙されたら我々の死體など何うなるか判らないのだ、だから遺書など書いたところで何になると思ひながらも書かざるを得ない氣持ちにかられた。無理もない、いま此處にゐる者唯一人として昨夜まで死ぬなどと考へた者はないのだ。天津の居留民團の人など、特にさうであらう。よもや驛に軍隊列車の送迎に來て、そのまま家族とも逢はずに死んでしまふなどとは夢にも思はなかつたに違ひない。

開原を出る時、妻は身重だつた。もう直ぐ生れるだらう。生れる子供に言ひ遺しておかう！

――生れ出づる子、正志よ。父は今此處に戰死す、何等悔ゆるところ無し、汝國家の爲その生命を捧げよ。

昭和十二年七月二十九日八時二十分

正美――

手帳に書き込んで胸のポケットに入れた。昂奮してゐたためか、生れる子を男と決めてしまつてゐたのは不思議である。

## 死の彈藥搜査

書置きまで作つて待つたが、敵は仲仲突擊してこない。わが軍の射擊は殆ど止んでゐる。彈丸がないのだ。敵は突擊を未だ開始しないが、突擊の氣配を見せつつ盛んに射擊を續けてゐる。我々は既に死を覺悟してゐるのだが我我の精神の緊張はもうこれ以上堪へら

れなくなつてきた。

『司令官殿！ 停留車中に確に彈丸があると思ひます。昨夜輸送券を持たない兵隊が小銃彈を十五六箱積み込ましてくれと云つて來ました。どの車に積んだか判りませんが、確かに何處かに積んであると思ひます』

昨夜かういふことのあつたのを想ひ出して、司令官に告げた。さうして机の上に燒却すべく積み重ねた書類の中から車號帳を搜し出して調べてみたが勝手に積み込まれた車輛の番號は判る由もなかつた。

『どの車に積んだか判らないか？』

『判りません、が皆で搜してみようと思ひます』

『さうか、やるか、ぢや賴む！』

このままでは皆ただ死を待つばかりである。彈丸を搜しに行つても皆が皆全部死ぬことはないだらう。もし、彈丸が見付かれば殘つた者は助かるかも知れないのだ。運惡く死んでもそれは尊い犧牲だ。決然として我々は彈藥搜査を引き受けたのである。

しかし、構內には約三百輛の貨車があつて、何處に彈丸を積んだ車があるのか全然見當が付かない。それで我々は近い所から始めることにして、三人一組となつて出かけた。

敵彈は盛んに來る。我々は貨車と貨車、卽ち線路と線路の間に飛び込んだ一組にペンチを一丁づつ持つて來た。これは貨車の封印を切るためである。が、當時封印は殆んど使用してなかつたので、比較的この點は樂だつた。

尙、空車は扉が開いてゐるのが多かつたので、これも隨分助かつた。貨車の扉から次の扉まで這ふやうにして行くのだから仲々はかどらない。彈丸は車が遮つてくれるので、思つたほどに來ない。しかし比較的來ないといふだけで前後左右、車のそこ此處に、ガンツ、ガンツと氣味惡く當る。

『有つたぞ！』何處かで高くはないが張り切つた聲がした。我々は大急ぎで司令部に引き揚げた。〇〇君が見付けたのだ。誰も怪我した者もない。まづ彈丸の箱を開けた、が、なんといふことだ！ 小銃の彈丸ではないのだ。步兵砲の彈丸か、山砲の彈丸か、我々には判らないが兎に角砲彈だ。

『うーむ、これが使へたらなア』

司令官は砲彈を摑み上げて唸りだした

『オイ、皆もう一度行かう』と坂口助役が今度は一番先に飛び出した。が直ぐ引返して來た。

『頭の上で迫擊砲が破裂した。背中がなんともありませんか？』

なる程シヤツの上に血が少しにじんでゐる。シヤツを脱がしてみたら二錢銅貨位のカスリ傷を負つてゐた。

『大したことはありません。チンキを付けませうか？』と轉轍の林重雄君が氣遣ふのを、

『いや、痛まないからほつといて下さい！』と坂口助役は笑つてみせたそして、

『さあ、皆もう一度行かう！』

再び三人一組となつて出かけた。今度は度胸が出來たのか怖くもなんともなかつた、作業も早かつた。

『有つたぞ、今度は間違ひないぞ』

〇〇君の班が一箱持つてきた。司令部の前に持つてきて、支那兵の死體の傍から拾つた青龍刀で箱をたたき割つた。有る有る！ ギツシリ詰つた小銃の彈丸だ！

『オイ、助かつたぞ！』と、林君が喜びを滿面にたたへつつ叫んだ。

『全部運んで來よう！』

『よし行かう！』

誰言ふとなく言ひだして、皆かけ出した。××線に押込んだ貨車に積んであつたのである。またたく間に司令部の前に三十箱ほど持つて來た。そして青龍刀で片ッ端から箱の蓋をたたき割つた。そして彈丸がなくて銃劍だけで頑張つてゐる兵隊さんの所へどんどん運んだ。

『いくらでも擊つて下さい。いくらでも有りますよ！』

『よしきた！ 射ちまくるぞ！』

嗚呼！ いふ者も、擊つ者もなんと心強い言葉だらう。沈默を續けてゐたわが軍は俄然射擊し出した。

『いくらでも擊つてくれ、銃が壞れるまで擊つてくれ！』

我々は、彈丸を運びながら、または整理しながら、全く有頂天となつた。元氣が百倍も千倍もした。彈丸さへあつたら、こちらが射擊してさへゐたら敵は決して突擊して來やしない。彈丸の有る限りは我々は助かるのだ。そして東站は敵に渡さずに濟むのだ。彈丸は擊ち切れないほど司令部の前に積んであるのだ。

## 土嚢構築

彈丸は發見された。二日でも三日でも擊つだけは大丈夫だ。萬國橋が引揚げられたため、租界からの救援隊は絕望である。今朝早く塘沽と通話した時の話では、塘沽も交戰してゐる由、それで滿洲から救援隊が來るとしても二三日はかかるだらう。

我々は救援隊が來るまで、二日でも三日でも此處で頑張らなければならない。彈丸は充分ある、が、我々の東站は無防備である。籠城するには防備しなければいけない。そしてこちらの損害を出來るだけ少くしなければならない。

土嚢が欲しい、と考へたとたんに名案が浮んだ。驛舍に避難してきた機關區の〇〇助役と工事列車の〇〇班長に早速相談した。

『貨物線にある工事列車には、鶴嘴とスコツプと麻袋があるでせう？』

『たくさんありますよ！』

『それを持つて來て土嚢を造りませう、どうですか、皆でやりませう』

嫌と云ふ者は一人もなかつた。

『かたまつて行くと射たれるぞ。皆十歩ぐらゐ間隔をおいて行かう！』

工事列車は比較的彈丸の來ない山海關寄りの貨物線にあつた。それでも驛舍から五六百米の距離はある。我々は五六米づつ間を置いて進んだ。隨分遠い感じがした。漸く辿り着いて鶴嘴とスコツプを一人で二つづつ持つた。麻袋は梱包にしてあるので、天秤棒で四人で擔いだ。往路は及び腰で隨分注意して行つたが、歸りは道具を持つてゐるのでそれが出來ない。

彈丸に當つても好いぢやないか、どうせ運だといふ氣持が自然に湧いてきて歸りは悠々（？）と歸つて來た。

漸く驛舍に歸り着いて、さて土嚢を造らうと思つたが、土も砂も手近にはないのだ。構內は全部滿線で、線路からは取れない。最初思ひ着いた時は、そこまでは勘定に入れなかつた。土と砂など、何處にでもあるといふ先入觀が平素我々の頭に入つてゐるためか、最も必要なものを豫算に入れてなかつたのである。が、窮すれば通ずで、

『ホームのアスフアルトを掘つたら下は土と砂だ、掘らう！』

『うむ、さうだ、やらう！』

遂に第一ホームを掘り返すことにしたのである。驛員も、保線區員も、機關區員も、それから居留民團の人々も皆協力でやつた。掘る者、麻袋に入れる者、皆一生懸命にやつた。仲々の難作業だつたが、土嚢は次々と出來上つた……。

### 爆擊機來援

土嚢を作つてゐる最中だつた。日の丸のマークをはりつけた飛行機が數臺我々の頭上に飛んで來た。

『オイ飛行機だ！　爆擊機だぞ！』

『さうだ、今朝の偵察機が連絡してくれたのだらう、おお、やるぞ！』

飛行機は旋回を始めた、そして急降下してきた。

『あツ！　落した落した！』

我々を取り圍んでゐる敵、卽ち東站を取り圍んでゐる建物に、次から次と爆彈が命中する。驛前の建物は五十米と離れてゐない、それなのに驛舍には決して落さない、わが空軍の爆擊は、神技にも等しいのである。驛前の建物は、爆彈命中每に破壞され、そして火焔を擧げだした。

昨夜來、我々を苦しめた敵は盛んに逃げる。または爆擊により瓦や土と共に吹き飛ばされる。

『態ア見ろ！　萬歲！』

我々は期せずして叫んだ。こんな氣味の好いことは生れて始めてだつた。兵隊さんも雀躍りして喜んだ。燒けてゐる驛の前の家（敵が今の今まで頑張つてゐた家）へ飛び込んで行つた兵隊さんがゐた。あれあれと思ふ間に西瓜を二つ抱へて飛んで歸つてきた。我々は全く有頂天だつた。

西瓜は、司令官以下居合せた者皆で一切れづつ食つたが實にうまかつた。昨夜から何一つ飲まず食はずだつたのだ。西瓜を食べて始めて空腹に氣がついたのである。

爆擊機はなほ盛んに活躍してゐる。敵の射擊はグツと下火になつた。が、未だ未だ安心するには早い。夜になつたら情勢がどう變るか判らないのである。我々は元氣を新にして土嚢の完成を急いだ。

### 賣店接收

土嚢を造りながら、ふと賣店に眼がついた。我々は賣店のすぐ横でアスフアルトを掘り返してゐたのである。今までは空腹に氣がつかなかつたので、賣店にも氣が付かなかつたのだが、先刻の西瓜で空腹を自覺した我々である――なんの遠慮などする筈がない。

『やらうぢやないか。俺達が負けたらどうせ支那兵のものになるのだ。支那兵のものになるより、俺達のものになつた方がまだ增しだらう！』

勝手に言ひ譯をつけて、鶴嘴でガチヤンとやツつけた。實に簡單である。ビール、サイダー、煙草、菓子、パンなど、なんでもお好み次第だ。司令官にも兵隊さんにも皆配つた。

賣店接收で、土嚢構築作業は一段と氣勢が上つた。

## 東站脱出

彈丸はいくらでもあるし、土嚢は出來上つて防備は完成したし、食糧は賣店接收でまづ大丈夫となつてホツとした。午後五時（十七時）頃、次の命令が出た。多分租界にある日本軍司令部及び居留民團、滿鐵事務所等の奔走によるものだらうと思ふ。

『東站にある非戰鬪員は東站を脱出し、白河を渡り英租界に引上げよ、英租界の附近に乘船の準備あり、武器の携行は許さず』

直ちに我々は引上げの準備にかかつた。人員點呼、その他總てを完了し、東站站舍西側の出口より出ることにした。生死を共にした河合部隊長以下と別れるのは實に感慨無量だつた。

我々は戰死者、負傷者を擔架に載せて、前田隊長殿の指揮により東站を後にした。前田隊長殿は、我々を安全に英租界に引上げさすため、軍服と愛刀を預け、非戰鬪員となつて我々を指揮して下されたのである。

『何處から射撃されるか判らないから、河の向うに上るまでは充分注意しろ、渡河中に射撃されたら自信のある者は河に飛びこめ！』

などとお互に注意し合ひつつ漸く河岸まで到達した。

向う岸を見ると、會社の上司、または同僚であらう、十人ばかり餘程氣をもんでゐると見えて河岸を右往左往してゐる。愈〻船に乘つた。向う岸に無事着いたら始めて安心してよいのだ、昨夜來覺悟した、死から生に蘇へるのだ。船はぢりぢり進んだ、向う岸にじわじわ近付いた。岸の上の人がよく見えてきた。阿部部隊長が私服でいられる。會社の上司の顏が見える。船に乘つてゐる我々以上に氣が急くと見えてあつちにうろうろこつちにうろうろしていられる。

船は無事に河岸に着いた。阿部部隊長並に會社の上司の方々が心から喜んで下さつた。

『よかつたよかつた！　大變だつたね、御苦勞だつたね！』

『死傷は無かつたか、腹が空いたらう、疲れたらう！』

『皆無事で何よりだつた。よくやつてくれた、御飯を造つて皆待つてゐるから早く行かう！』

我々は答へる言葉が口から出なかつた。昨夜來、どれほど我々のことを心配されたことだらう、上司のこの心、この言葉に我々は只々涙が出るのみだつた。

死傷者を病院自動車に乘せてから、我々は天津事務所の自動車に一同乘せて貰つた。バスを用意しておいてくれたのである。自動車は事務所へ向けて直行した。

我々は遂に助かつたのである。

滿鐵社員として、鐵道從事員として我々は我々の全力を盡したつもりである。走る自動車の中で、我々は全く放心狀態だつた。街の建物も、並木も目に映る總てが別世界のもののやうに見えた。

死と生の境を、たつた今通り拔けたばかりの者が陷る放心狀態、爲すべきことの總てを死力を盡してなし遂げた者が、その直後に陷入るべきであらう放心狀態とでも云はうか、眞に無我の境に等しい氣持で我々は天津事務所に送りとどけられたのである。

天津事務所の人々が、握り飯と番茶を用意して待つてゐてくれた、逢ふ人毎に知つてゐる人も知らない人も、誰も彼もが――

『お疲れでした、大變でした！　ごゆつくりお休み下さい！』

と心から慰め勞つてくれた。

（天津事務所で、折角我々のために造つてくれた握り飯は實は咽喉を通らなかつた。心身共に疲れ果てて食へなかつたのである。お茶だけは隨分たくさん戴いた。事務所から各宿舍にバスで送つてくれた。我々驛勤務者は、旭街の宿舍に送つて貰つた。自動車から降りて宿舍に入つて瞬間である。我々はそこに何を見ただらうか！

懷しい同僚が物も言はずに飛びついてきたのだ。感極まつて泣いてゐる。男同志が抱き合つたまま、一言も云はずに皆泣いてゐるのだ。抱き合つたまま泣きながら、疊の上に轉んでゐる者もゐた。

筆者は開原驛から一緒に來た谷助役と、手を握り合つたままべたべたツと坐り込んでしまつた。涙が自然に滲み出てきた、が拭かうといふ氣持にもならなかつた。言はざる愛情は千萬言に優る。人間の眞情と眞情が互にその極致に觸れ合つた時、言葉は不要なものであらう。

各員同じ使命の下にこの大陸を墳墓として、共に喜び、共に働き、共に泣き、共に生きるべく運命づけられた我等社員間の愛情が、いかに強く我々の心に潛在してをるかを、今、眼の前にはつきりと見せられたのである。（完）

（大陸建設手記――滿鐵・華北交通社員會共編より）――（筆者は華北交通社員）

# 北・支・の・釣

吉池善太郎

## 北京の太公望

北支からは釣界の大先輩、太公望が出て居るにも拘らず、釣技も、釣具もずつと低い。これは釣をする人が尠く、從つて魚も漫々的なので、簡單な操作で釣れた故であらう。

併し事變以來、日本人が多數入つて來て、水さへ見れば釣糸を垂れる樣になつてからは、魚もなかなか素ばしこくなつて、北京などでは釣具も内地製の精巧なものでないと、良い結果は得られないやうになつた。

日本人の釣好きには、北京の中國人も驚いて居る事と思ふが、日曜など周圍三、四粁もある北海、中南海の岸に集る太公望の數は相當なものである。中國式の形容をもつてすれば「魚竿蓋海水」とでも言ふのかも知れぬ。

此處には貸ボートがあつて、中國人の呑氣なのが、うつかり竿の鼻先にボートを近づけて、釣師から呶鳴りつけられる。釣師にして見れば、廣い池なのにわざわざ釣竿の近くに來なくともよからうと思ひ、それが偶々當りがあつた時ででもあれば、其の氣持ちは判るのであり、呶鳴られた相手は又相手で、只ボートに乘つて居る譯ではない何處に漕いで行かうと勝手ぢやないかと思ふに違ひない。孰れにしても面白い風景ではない。

元來、釣師の姿は、見る人には如何にもおほらかな、浮世離れのした禪味を印象させるが、當人にして見れば、浮子の微かな動きをも見逃さぬ針の様に尖つた神經と、獲物に對する功利觀念は、なかなか深刻なのである。

尤も太公望の元祖、呂尙が渭水のほとりで竿を垂れて居た時は、眞直な、しかも空鈎を使つたと謂ふから、はじめから魚を釣る氣は無かつたので、それならば其の姿は悠容迫らざるものであつたに違ひない。

ところが彼は魚どころではない、名君を釣らうとしての僞裝釣師であつたのだから、其の心境たるや實に俗臭ふんぷんと言ふべきで、現代の大公望が俳畫的風景から縁遠い存在であつたとしても、さう恥ぢ入る必要はないかも知れぬ。

北京の釣は鮒が主で、鯉、鯿、すつぽん等が交る。

春は蚯蚓、初夏から秋にかけては、ねり餌が用ひられる。數尾の鮒を釣るのに一回の入漁料一圓は未だしも、蚯蚓一匹一錢から三錢位すると言つたら内地ではほんとにしないかも知れぬ。

中國人は舟で錨型の掛鈎を用ひ、水中を模索して引掛鈎をやるが、三尺もある大鯉をあげる所を目擊したことが

ある。

都心を離れて田舍へ出ると、相當面白い釣もあると思ふのだが、治安の關係で今のところ、內地の樣に自由な野釣が出來ないのは、健康な娛樂の少い現地人にとつて、いろんな意味で殘念である。

## 北支の鮎

北支の河川は黃河が代表するやうに大部分が濁流である。上流は兎に角、海口まで淸澄で鮎の棲みさうに思はれるといふ河は見當らないのである。

河ばかりではなく、アユに當て嵌る字が無い。支那語で「鮎」は「なまづ」を指すのであつて、アユとなまづでは餘りに格が違ひ過ぎるやうである。

ところが、唯一つ山海關の南を流れる河に鮎が居るといふ話を聞いたので出掛けて見た。十五年の初秋の頃と記憶する。內地式の友釣と、ゴロ引の用意をして勇躍現場に行つて見ると、水が尠い。それに內地ならば丁度產卵期の友釣と、引掛けには最適の月である筈なのが、山海關の九月末はもう早餘り寒く、已に產卵を終つた尻コケの、それも柳ツ葉程度のものが、フラフラとゴロ引に引つかかつて來るばかりであつた。それでも流石に鮎特有の香りはあつて、北支で獲れた鮎だとばかり北京まで大事に持つて來た事であつた。

翌年の春、朝鮮へ出張した際、京城から毛鈎を十種程、お染系統の赤を買ひ込んで來たが、氣が進まず、その儘になつて居る。

五六月頃のドブ釣ならば、未だ荒れて居ないだけに確實だと思ふ。

## 塘沽の鯊

鯊は極く簡單な釣であるのは、何處でも同じだが、塘沽の鯊ほど樂な釣を味つたことが無い。釣場が鹽田なので畔に腰かけて、深さ一尺あるかなしの田の中へ、五六尺の竿で探ればいいのである。餌は海老の切り肉、三時間位で六・七寸のものを百近く釣つた。

## 滿支國境の海釣り

海釣りは靑島、秦皇島、北戴河等歩いて見たが、舟釣りでないと大物は上らないやうである。

去年の秋、山海關に居る友人から鱸釣を誘はれた。山海關から一つ滿洲國側に入つた小さな驛で列車を降りた。滿洲鐵道警護隊の人の案內で、驛前には村長の家から迎への幌馬車が待つて居た。午前三時頃であつたらうか、すいがれた高粱の葉越しに、傾きかかつた月が、長城の稜線に引つ掛つて、ひどく印象的であつた。

支那馬二頭に牽かれた馬車は、シャンシャンと鈴を鳴らしながら、凸凹の激しい野道を進んで行く。國境線を一寸越しただけで、線路から六粁も離れた部落に、眞夜平氣で入つて行ける滿洲國の治安を私は羨しく思つた。犬の吠え聲がけたたましく起つて部落に着いた。

未だ夜は明けなかつたが、滿人の漁夫の案內で海に出た。一時間程艪舟に搖られて、目指す漁場に到着した頃、東が白み出した。

釣の要領は十尋位の澁絲の先に鰡を刺し、錘無しで潮の下流に向つて投げるのである。二尺前後の鱸が一時間足らずの間に、二十尾程も上る痛快な釣であつたが、海のうねりが大きく、醉つて吐く者が出始めたので、心殘りではあつたが切り上げた。

村長の家では、彼等としては恐らく最大級の饗應であらうと思はれる食卓で歡待して吳れ、歸りは再び幌馬車に送られて、一行が釣つた獲物の外に、網で獲れたものや、瓜、唐もろこし等文字通り海の幸、山の幸を持ち切れない程土產に貰つて、歸つて來たのであつた。（筆者は華北交通社員）

# 可園雑記

加藤新吉

四月二十八日、我々は五月十日限り可園を立退き無條件を以て家屋を家主に返還すべし、との示達を受けた。三月、期限猶豫の歎願書を出して以來音沙汰なく、突如この示達を受けたので居住者一同大いに慌てた。しかも、五月十日の期限は絶對であり、若しそれまでに引越をしなければ、處分されるといふ話なので、仕事片手に家探しをしてゐたのでは間に合はぬ。勤務を休んで荷造と家探しとを併行してやるといふ日が、どの家でも何日も何日も續いた。

海棠も散り丁香も散つて、庭には例の「はなだいこん」が紫の可憐な花を見せてゐる。この庭のこの花を見るのもこの數日であり、この春が最後である。京都帝大の三木博士との「花咲かば」といふ約束を思ひ出して、標本にして送る手配をした。若芽を吹いた楡と槐との老木に訪れる春の鳥は、ここに居た間にはたうとう種類と名稱とをはつきり突きとめ得ないでしまつた。從つてまだ名を知らぬ鳥たちが多いのであるが、それだけに却て名殘が惜しまれもするのである。

荷造り、造作の取外し、家探しといふ可園十數戸を擧げてのざはめきに、熱を出した敏感な子供がある。犬たちも異狀を感ずると見えて、落着をなくしてむやみに吠える。猫は、本來人につくものではなくて家につくものと云はれてゐるので、引越の際に行動を共にするであらうかといふのが家人の心配である。もともと奉天からの引越にも伴れてきたのだから案ずる程のことではないと云つても、それでも心配になると見えて、家人は毎日「一緒に新しいお家に行くんですよ」と言ひ聞かせて居る。犬でも猫でも、よく言ひ聞かせればわかる、といふのが彼女の信條である。

家はある、引越先がないといふのは口實に過ぎない、新聞にも毎日貸家廣告があるではないか、と役人は言つたが、それは眞實で、あるか無いかと云へば北京にも勿論家はある。特に大きな家なら相當多數に空いて居る。主人が香港や重慶に逃げた後を、別人名義で保管されてゐるのもある。だが、概言すれば我々に手頃な借家はない。あつても「日本人には貸さぬ」といふ。概ね賣家、それも五萬、十萬、十五萬といふ手の屆かない値段のものか、値は安くても莫大な修繕費をかけねばならぬものか、その種のものはあるが、あつても御緣がない譯である。

私に同情した一友人、これは滿洲以來交際してゐる滿洲國人であるが、大いに骨を折つてくれた。手頃な借家は到底見込がない、といふのが彼の見解で、賣家を買つて貸して呉れようといふのである。私も一時はその好意にすがることにして、一緒に方々の家を見て歩いた。併し、賣主と買主と借主との話が折合ふといふことはなかなか難しい。結局當分はホテル住居と決心してゐたら、華北交通の住宅係が無理をして行先をきめてくれた。聞けば從來の居住者たる興亞院の調査官某氏を無理矢理に追ひ立てたといふ。致方なき成行とはいふものの申譯なき次第である。尤も、迷惑をかけたあやまりに行つてみたら、米人が建てた堂々たる住居をうまく手に入れて、某氏も家族も喜んでいられたので、いささか肩の荷を下しはした。

# 支那農業に關する若干の研究書

従來、支那農業に關する研究は、主として中國人或ひは歐米人によつて爲され、日本人によつては餘り爲されてゐなかつた。從つて今日まで日本に於て刊行された支那農業に關する研究書にして日本人自身の手になるものは、極めて少なく、中國人又は歐米人による研究を飜譯したものが非常に多い。勿論、部分的な研究や調査報告書、或ひは年報等は、各種の調査機關や多くの人々によつて發表されてはゐるが、それらを支那農業全體として綜合し、體系づけたものが極めて少ないのである。現在、吾々の目に觸れる限りでの日本人の手によつて一應一册の書物として纏められた研究書は、天野元之助著、**支那農業經濟論**上（改造社）梨本祐平著、**北支の農業經濟**（白揚社）石川正義著、**支那の農業**（昭和十六年十月、滿鐵弘報課編、中央公論社版）位のものであらうこれに反して、中國人或は歐米人の著書で邦譯されたものは比較的多數に上り、歐米人によるものとしては、かの著名なロッシング・バックの**支那農業論**上、下（三輪、加藤譯、生活社刊。鹽谷、仙波、安藤譯の別譯支那の農業あり）を初めとして、K・A・ウイットフォーゲルの**支那の經濟と社會**（平野義太郎監譯、中央公論社版）W・ウイルマンスの**支那農業經濟論**（若林友康譯、生活社、勝谷在登譯の別譯、支那農業機構論あり）W・ワグナーの**中國農書**（東亞研究叢書第八巻、高山洋吉譯、生活社刊）L・マヂヤルの**支那の農業經濟**（早川二郎譯、白揚社）R・H・トーネイの**支那の農業と工業**（浦松佐美太郎、牛場友彥譯、岩波書店刊）等があり、中國人の研究になるものとしては、陳翰笙の**南支那に於ける農村社會**（佐藤愛三譯、叢文閣）及び**支那農村經濟と産業資本**（ウイットフォーゲル監修、殿生文男監譯、東洋書館）聶國青の**中國土地問題の史的發展**（勝谷在登譯、慶應書房版）太平洋問題調査會の編輯にかかる「アグラリアン・チヤイナ」の邦譯である**中國農村問題**（東亞研究叢書第二卷、杉本俊朗譯、岩波書店刊）中國農村經濟研究會の編輯にかかる「中國土地問題と商業高利貸」の主要論文を邦譯せる**現代支那の土地問題**（堀江邑一譯、生活社版）等があり、何れも支那農業に關する優れた研究書である。

吾々が支那の農業に就て一般的な概念を得る爲には、バックの**支那農業論**を一讀するのが最も良い。本書は一九二九年－三三年にわたつて支那二二省一六八地區一六、七八六箇所の農村及び三八、二五六の農家に就て行つた實態調査を取りまとめたもので、其の內にもられた材料の豐富さが何よりも本書の價値を高めてゐる。ワグナーの**中國農書**、ウイルマンスの**支那農業經濟論**の二つの著書も、バックの支那農業論と同じく、支那の廣汎な實地調査に基いて記述されたもので、共に優れた研究書である。石川正義の**支那の農業**は、著者がそのはしがきに記してゐる通り所謂農業經濟論の內容を少しも含んで居らず「支那農業の自然的條件」と、その「自然條件」に基礎づけられた「地域的類型」に就て、若干の展開を行つたもので、支那と云ふ廣大なる土地を生産的に見た場合に、それが地域的に如何に分けられ得るかと云ふ一應の概念を與へて呉れる好著である。天野元之助の**支那農業經濟論**は、上卷のみで七百數十頁に及ぶ大著で、（其の內容は、土地制度、階級構成、小作制度、雇傭勞働、農村副業の**五章**に分たれ）豐富、廣汎なる資料を縱横に驅馳して問題を具體的實證的に解明してゐる點に特色がある。殊に各章の終りに附せられた文獻紹介は支那農業の研究家に取つて見逃し得ないものである。支那の農村社會に對して鋭い科學的分析のメスを加へ、特に、生産諸力の問題にアジア的な特質を見出さんとしたウイットフォーゲルの**支那の經濟と社會**、支那農業の特殊性、土地諸關係、階級分化、帝國主義の支那農業に對する影響等の諸問題を論述したマヂヤルの**支那の農業經濟**の二著は、著者の名前と共に普く人の知るところである。

昭和十七年六月十五日印刷納本
昭和十七年七月一日發行

**七月號**
（毎月一回一日發行）

會員登録番號 一一六五〇八番

編輯者　北京・華北交通株式會社資業局　加藤新吉
發行者　東京市麹町區三番町一　長谷川巳之吉
印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社　古川一郎
（東京）（一一〇四）
發行所　東京市麹町區三番町一　**第一書房**
振替 東京六四二二三番 一四一五番
電話九段（33）三三四四番

一册定價㊕**三十銭**（郵送料一銭五厘）
一ヶ年分　**金三圓六十銭**

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年六月十五日印刷納本 昭和十七年七月一日發行(毎月一回一日發行)第三十八號



北支 定價 三十錢